帝華魔法戦争

#NkY

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※ｐｉｘｉｖにて同内容の小説を上げています

にじさんじＳＥＥＤｓの鷹宮リオン・飛鳥ひなが所属する、私立帝華高校の世界観をお借りした二次創作作品です。

独自解釈・独自設定・オリ主等含まれます。残酷描写は比較的軽度。

カッコいい戦うリオ様・ひなひなが見たい。

目次

序章
プロローグ ―――――― 1
第1話 ―異変と邂逅― ―――― 8
第2話 ―提案― ―――――― 23
第3話1 ―学生寮の案内役― 36
第3話2 ―想い― ―――――― 43
電気街異変編
第4話1 ―溢れる歪― ―――― 49
第4話2 ―駅前占領― ―――― 55
第4話3 ―光の雨― ―――――― 60
第5話1 ―校長の状況説明― 66
第5話2 ―はやての日常― ―― 70
第5話3 ―極秘任務― ―――― 73
第5話4 ―レクイエム― ―――― 79
学園閉鎖編
第6話1 ―確実なる侵食― ―― 88
第6話2 ―風紀委員室での一幕― 92
第6話3 ―『普段の』任務― 96
第6話4 ―開戦の予兆― ―――― 101

序章
プロローグ

灰色の壁で四方を囲まれた、明かりのない暗い密室。人が一人だけしか入らない広さの空間の中で、高校生の少女――中島はやては目覚めた。

（ここ、は……どこだ？）

はやては戸惑った。手を伸ばせば、すぐに壁。目を覚ました場所がこんな場所なのだ、戸惑わない訳がない。

なぜ、こんな場所で目覚めたのか。はやては記憶を取り出そうとした。

（嘘、思い出せない……何も、分からない……！）

取り出す記憶が、消えていた。はやては混乱した。混乱の中、一つだけ把握できたことすれば、ここから脱出しなければならないということだった。

若干の喪失感を抱きながら、はやては脱出の手がかりを探して暗闇の中を手を伸ばして探る。しかし、いくら探ろうとも手のひらからは金属の冷たい感触しか得られない。脱出に役立ちそうな情報を得ることは、到底不可能に近かった。

知らない場所、極めて狭い空間に、視界を制限されて放り込まれる。脱出の手がかり

は掴めそうにない――。

はやては得も言われぬ恐怖を感じていた。このまま出られずに餓死か、それとも窒息死か。記憶喪失の衝撃を忘れ、人生の終わりが突如として近くなったことをハッキリと実感した。

心臓が早く脈を刻み、過呼吸を起こした。極度の不安で胸が押し潰されそうになった――その時。

突如、地鳴りのような轟音と共に、激しい振動がはやてを襲った。恐怖でギュッと目を閉じ、縮こまるはやて。

刹那、はやての脳内に映像が流れ込む。薄暗い実験室らしき場所に投げ出され、そこに待ち構えている白衣を着た研究員らしき人が４人。彼らはハンドガンで、はやてを殺しにかかる。

すぐにその状況は起こった。振動が収まり密室が開け放たれた途端、薄暗い空間の中で一斉にハンドガンの銃声が響く。

「――っ！」

はやては驚異的な反応速度を見せた。とっさに隠し持っていた２本のナイフで器用に銃弾を弾き返した。

「うっ……ぐ……！」

跳ね返した銃弾が研究員の1人に命中し、白衣が赤に染まりそのまま腹を抑えながらゆっくり倒れる。

「くっ……緊急事態発生！『副産物』の対処に失敗、増援求む！」

それを見た残りの3人はそそくさと逃げ出した。1人はトランシーバーのようなものを使用し、何やら連絡を取っていた。

はやては息を切らして辺りを見渡した。薄暗い部屋、おそらく研究室だろう。厳重に囲われたケースの中には、宝石のようなものが妖しく鈍い紅の光を放っていた。はやてはその宝石に危険を感じて、近付こうとはしなかった。

「いった……ちょっと、食らったかも」

少し落ち着いてくると鎖骨の辺りに鈍い痛みを自覚した。おそらく跳ね返し損ねた銃弾が命中したのだろう。おそらく、服は自分の血で染まっている。

しばらくして、非常警報のサイレンがけたたましく鳴り始める。僕はここにいてはならない。彼女はそう認識すると、両手に2本のナイフを携え駆け出した。

再び脳裏に映像がよぎる。部屋から出ると、日本刀のようなものを持った金属のロボが前後から挟撃してくる映像が。

そして、そのとおりになる。ボタンを押して金属で出来た頑強な横開きの二重の扉が開かれると、大人の男性ぐらいの身長のロボットに挟撃された。その凶刃は、同時に素

早く的確に首を狙ってきた。
はやてはそれを予測していた。ギリギリまでひきつけた上で、姿勢を低くして間一髪避ける。ロボットの正確さと素早さが災いして、向かい合ったロボット同士を同時に斬りつけ合う形となった。
金属の塊となったロボットが崩れ落ち、ガチャン、と真っ二つになった上半身が床に落ちる。断線したコードからは漏電が起こっていた。はやてはそれに構う間もなく、廊下を駆け出した。床には日本刀に斬られた黒髪が少し散っていた。
サイレンの中、赤い警告灯に照らされながら、はやては時折脳裏に流れこむ映像を利用し、建物内の数々の罠を突破していった。レーザートラップを軽快な身のこなしで避け、タレットの銃弾をナイフで弾き返し――。小さな傷さえ負ったものの、体力は充分なまま非常口へと向かう。非常口への道筋は、建物内の避難経路図から得た情報だった。
「対象と接触！　詠唱を始めよ！」
そして、非常口の前。大人５人位が通れるサイズの狭い廊下にて、金属製のライオットシールドを持った黒いアーマーをまとった軍団、およそ５０人が縦に横にいっぱい広がり行く手を塞ぐ。威厳ある老獪な声の号令に従い、彼らは確実にはやてを『処理』すべく、一斉に魔法の詠唱を始めた。

（映像が……来ない……！）

予測が出来ない状況に戸惑うが、スキを晒せば死ぬ。はやての防御手段はナイフ２本、あまりにも脆弱である。とはいえ、ここで逃げることなど出来ない。はやては盾持ち相手に果敢に切りつけにかかる。

しかし、狭い廊下で裏を取れない状況下。重装備相手にナイフはあまりにも分が悪すぎた。ライオットシールドによってたやすく弾かれ、体勢を崩し尻もちをついてしまう。

「放て!!」

好機と言わんばかりに、号令と共に詠唱を完了した魔法使い達による魔法――それも、長時間の詠唱を必要とする大魔法――の弾幕が一斉に襲いかかる。避ける間もない無数の火球の弾幕――というよりは炎の壁に、風がまといより威力が増加する。

はやては絶望的な感情を抱いた。大量の冷や汗が頬を伝った。逃れ得ぬ死が、目の前にじわりじわりと迫っている。逃げなければいけない、しかし恐怖で身体が硬直して動かない――！

橙色の輝きと熱風で威圧をしながら、炎の壁はスキを晒しているはやてを押しつぶす。炎の壁が消滅している頃には、はやての姿は塵芥一つ残さず消えて『処理』されていることだろう。

その、はずだった。

炎の壁は、跡形もなく消えた。自然消滅ではない、『消された』のだ。

「なっ……!?」

はやては、何がなんだか分からなかった。ただ、自分が生きていることだけは感じ取れた。

「黒蝶石か!?　いや違う、黒蝶石と言えども発動した後の魔法は打ち消せられないはず……!」

そして、もう一つ。――この状況はチャンスだ。

はやては慌てふためく軍団の上を取り、頭を地面に見立て踏みつけながら非常口へと向かった。

大魔法の反動か、はたまたそれが効かなかったショックか。敵の抵抗は皆無に等しかった。さして苦労することなく、はやては非常口へとたどり着いた。

しかし。

「うぁ……っ!?」

気が緩んだのだろうか。非常口を通った瞬間、無警戒だったはやてにレーザーが降り注いだ。脳を揺らされるような衝撃を受け、一瞬はやての意識はブラックアウトし体勢をふらつかせた。だが、すぐに持ち直してはやては駆け出し、行方をくらませることに

成功した。

どうやら敵は、あの軍団で確実にはやてを始末できると踏んだのだろう。脱出後の追跡はそれほど厳しくはなかった。

第１話　―異変と邂逅―

透き通った金の髪は、いかにも高級そうな臙脂色の大きいリボンによって、長めのツインテールとして束ねられていた。彼女が歩けば、ふわりとそのツインテールが、そして肩くらいまで垂れ下がった横髪が後ろにたなびく。

「リオ様ー！」

「り、りりリオ様っ、本日もおちゅかれ様でしたっ！」

次々と飛び交う女子生徒の黄色い声に対し、『リオ様』と呼ばれた彼女は柔らかい笑みを浮かべ愛想よく手を振る。

「ええ。御機嫌よう」

彼女が通った後にはほんのりと甘い香りが漂い、女子生徒達は恍惚とした表情を浮かべる。

向かう先は、唯一無二の親友の元。

「あ、リーオー様っ。待ってたよー、ぴよ、ぴよ」

どこか、気の抜けた声がした。声の持ち主は、彼女を見つけると手を小さくゆっくり振る。

エントランスに置かれている高級ソファ。そこにちょこんと座って寛いでいたのが彼女の親友である。

目につくのは頭の上にある大きな白いリボン。眉毛が隠れる程度の長さにぱっつんと切り揃えられた前髪。後ろ髪は若干くせっ毛で、ミディアムな長さ。色はロージーブラウン。淡い赤みがかったベージュとでも言えばいいだろうか。

やはり、彼女にもお嬢様の風格が漂っていた。

私立帝華高校の2年生である鷹宮リオンは、幼馴染の飛鳥ひなと共に迎えの車待ちをしていた。

私立帝華高校は、いわゆるお嬢様・お坊ちゃま学校である。二人も例に漏れずそんな身分であるから、車での送迎は珍しくないわけだ。事実、高校側もそれを認識しており駐車スペースが他の高校のそれと比較するとやたら広く取られている。

「リオ様ー、ねーむーいー……」

ひながエメラルド色をした瞳をとろんさせ、いかにも眠そうな顔を向けて来る。その光景がリオンには小動物に見えてきて、思わず頭に付けている大きな白いリボンごと頭を撫でてしまう。

「えひゃぁ……♪」

変な鳴き声を漏らしてとろけきった顔で、身体を預けて気持ちよさげに撫でられるひな。何その声、とリオンはくすっと笑うと。

「今日も実践授業だったからねー……ひなに取ってはちょっと大変よね」

リオンはそう語りかけながら、少し疑念を抱いていた。ここ最近に来て、魔法の実践授業が急に増えてきたのだ。

私立帝華高校には特進クラスという、魔法族という魔法使いの資質がある人間が秘密裏に魔法を勉強するクラスがある。リオンもひなも、その特進クラスの生徒である。

魔法族はとある事情により、魔法使いバレを避けるために表立って魔法を使用することはほとんどない。魔法の実践授業もそれを避けるという建前のもとあまり頻度は多くなかったのだが……最近、明らかにその頻度が増えているのだ。特に今週は３日連続で実践授業があった。

「ひな、最近不安に思うことがあってねー」

「不安？」

頭に手を置かれたまま、ひなはつぶやく。

「うんー。実践授業、増えてきたでしょ？　私、疲れてすぐ寝ちゃうから……」

魔法使いも、魔法を行使する際に体力を大きく消費する。訓練によってその体力を鍛えることが出来るが、生まれ持った素質によっても大きく変化する。ひなは、魔法を扱

う素質こそあるものの体力が追いついておらず、一回使用すると深い眠りについてしまうのだった。
「授業中でも寝ちゃうものね、ひなは」
「不可抗力なの。でも、いつもそうだと授業にろくに参加出来ないでしょ?」
「そうね……」
授業ごとに寝てしまうひな。訓練すれば鍛えられるとは言ったものの、当然寝た時間だけ他の生徒との差は広がる一方だ。
「だから、克服したいなーって最近思っててねー……魔法も上手いリオ様なら、いい方法知ってるんじゃないかなって」
「うーん……前にも話したと思うのだけど、私は子供の頃から使用人に教えてもらってたから。そういう方法は正直あまり分からないのだけど……」
そう言って、リオンは目を反らすように外に目を向けた。少し、申し訳なさそうに。
「でも、ひながそういうのなら力になりたいわね。あなたの魔法を見て、アドバイス位なら出来ると思うし……」
力になりたい。リオンが心から素直に思える相手は、ひなただ一人だった。
「リオ様っ」
ひなはキラキラとした純粋な瞳を向けてくる。抱きつかんとする勢いだが、さすがに

人前なので自重しているらしい。
（自重出来るんだ……）
　変なところで、リオンは感心してしまった。
「リオ様ー、まだ時間あるからコンビニ行こ？」
　最近、ひなは迎えの車を待つ間こっそりとコンビニに行くことがマイブームとなっている。目的はお菓子を買うこと。
「んー……いいわ、ついていってあげる」
「あれ？　いいの？」
　予想とは違った答えにひなはきょとんとした。ひなはリオンにいつもそんな感じで誘うものの、大抵は『宿題を済ませたい』だったり『休憩してたい』だったり『ひなの呪縛から解き放たれたい』などと何だかんだ理由をつけられて拒否され、結局一人で行くことが多かったからだ。
「じゃあ行かないわよ？」
「やーだ！　一緒に行くのー！」
　小さな子供みたいに駄々をこねるひなに苦笑いするリオン。二人は校舎と呼ぶにはあまりにも豪華すぎる建物を後にした。当然のごとく、昇降口は自動ドアである。
　帝華高校の付近には細い裏路地が存在する。車送迎でない帝華高校の生徒が登下校

に使用する程度で、人通りや車はほとんどない。ひなは普段ここを通って、コンビニへお忍びで向かっている。

「結構雰囲気いい場所じゃない。こうやって久々に来たけれど」

レンガ模様で舗装された道路が、夕日に照らされオレンジに照り返す。周りの民家はほぼ年季の入った木造住宅、そうでなくても景観を壊さないよう木の色で塗装されている。付近の表通りもだいたい帝華学園グループの影響でそんな感じになっているのだが、なぜこんな人気がない場所までもかかわらずここまで気合の入った景観にしているのだろうか。

「いいでしょ、リオ様。エモーい場所でしょ?」

「うーん……何か、違くない?」

相変わらず気の抜ける、のほほんとした声。リオンは少し首をかしげた。ひなとリオンは、他愛のない会話をしながらコンビニへ向かう。しかし、リオンは感じていた。

何かが、おかしい。

「ひな。……分かる?」

「リオ様……?」

その違和感に耐えきれず、リオンは足を止め真剣な口調でひなに聞く。

「魔力が……不気味な魔力が満ちているわ」

「え……」
ひなの頬に一筋の汗が伝った。
「――来る」
そう呟いた瞬間。空気中に満ちている魔力が一点に集中し、紅のエネルギーとなって固まる。そしてそこから醜い狼が一匹、また一匹……と、産み落とされていく。
「嘘、魔物……!?」
ひなは怯えてリオンの陰に隠れる。魔物との邂逅はひなにとって初めての出来事だった。
狼の魔物達はリオン達を鋭い眼光で睨みつけ、涎を垂らしながら不気味な唸り声を発していた。今にもこちらに襲いかかりそうだ。
リオンは冷静に、すぐさま赤い鉱石のついた短杖を取り出した。
「はぁあああぁーっ！」
その短杖にリオンは魔力を込める。すると、その短杖はリオンの身長以上の鎌に形を変えた。強力な魔力の波で、リオンのツインテールにまとめた金色の髪が、夕日に照らされオレンジに光りながら激しく美しくなびく。ひなはその光景に見とれていた。
「ひな、油断しないで！　最低限の自衛はしてよね！」
「う、うんっ」

ひなも杖を取り出す。上側に植物の双葉が生えている奇妙なものだが、そこに魔力を込めると杖が伸びて上部がぐるぐる巻きとなり、その双葉はぐるぐる巻の根本に移動しリボンとなった。

「ひなもリオ様を助けるよ！」

「ありがとう、でも無理はしないで！」

ひなにとっては初めての実戦である。魔力に不安のあるひなは自分の力に心細さを持っていたが、そんな事は一切関係のない状況であった。油断すれば、冗談抜きで死ぬのだから。

「グオオォォッ！」

ひなの身長くらいの大きさを持つ狼の魔物は、思わず足がすくみそうなほど不気味で低い咆哮を上げながら、一斉にリオンめがけて突進して襲いかかってきた。

「炎よ鎌に集え――」

リオンは軽く詠唱して鎌に炎をまとわせる。

「グァウッ！」

一匹が飛びかかり、噛み付いて来る。常人にはまず、反応出来ない速度で。

「はあぁっ！」

しかし、リオンはそれに合わせて火の粉を散らしながら鎌を横に薙いだ。魔物はか細

い断末魔を一瞬あげると同時に、綺麗に上下に真っ二つにされ、地面にびちゃりと落ちた。

リオンは華麗な鎌さばきで次々と突っ込んでくる狼の魔物を焼き斬っていく。自身の魔法によって強化された身体能力により、リオンは驚異的な反応速度を得て魔物をさばいていく。

炎をまとった鎌は赤い軌跡を描いて踊り、魔物をたやすく両断し黒みがかった紅の魔力の飛沫をあげる。真っ二つにされた魔物の屍が辺りに散らされ、屍から次々と魔力が蒸発して空気中に還って中和されていく。

「リオ様、大丈夫!?」

「大丈夫！　この程度なら無傷で行けるわ！」

不安そうに尋ねるひなに、キリっとした顔でリオンはうなずく。その真っ直ぐな紫の瞳に、ひなは少し胸が締め付けられるような感覚を覚えた。

「リオ様――ひなは、信じてるよ！」

リオンが全ての攻撃を引き受けるため、ひなに魔物の攻撃が飛んでくることはなかった。リオンの体力をカバーするため、ひなはエネルギータンクとして魔力を供給し続ける。

「これで、最後!!」

リオンが飛びかかって来る最後の一匹を斬り上げる。空中で鎌の先端に突き刺された魔物に、追撃の炎が身体を貫いた。魔物は飛沫を上げながら跡形もなく粉々に砕け散り、空気へ還元された。

「……もう、気配はないわ」

静寂。不気味な唸り声はもう、聞こえない。お洒落にレンガ模様で舗装された地面には、まだ蒸発しきっていない魔物の屍が散らばっていた。

リオンとひなは、それぞれ展開していた得物を元に戻した。

「リオ様……ありがとう……!」

「うわ、わっ!?」

終わるやいなや、ひなはリオンに抱きついた。怖かったのだろう、その緑の瞳は涙に溢れて光っていた。

リオンはひなを思い切り強く抱きしめ返した。ひなの身体が小さく震えるのを感じ取っていた。

「怖くて……怖くて……」

「……よく頑張ったわ、ひな。私もひながいてくれて、少なからず助かった」

頭を優しく撫でてあげるリオン。

「ほんと……？　ひな、リオ様の役に立てた……？」

「ええ。魔力供給、助かったわ」
　ひなが落ち着くまでしばらく、リオンはひなを離さなかった。あれだけ頑張ったのだ、ひなはやがて寝てしまうだろうとリオンは思ったが、ひなが眠くなる素振りは一切見せなかった。
「ひな……大丈夫？　無理して起きてない？」
　落ち着いたのを見て、リオンはひなを離した。
「んー、全然眠くならないんだよねー。何でなのか、ひなもわかんない」
　リオンは、ひなが嘘をついて無理しているようには到底思えなかった。
「不思議な事もあるものね。……ひな、コンビニはさすがに諦めて戻りましょう？」
「そうだねー。ちょっと残念だけど、何が起こるか分からないもの」
　二人は帝華高校へと戻ろうと、来た道を戻ろうとした――その時。
「!?　ひな、後ろ！」
「リオさ――」
　ひなが振り返ると、狼の魔物がひなの頭ぐらいの大口を開けて喰らおうとしている最中だった。その距離、１０ｃｍ。
　全く気配を感じなかった。ひなは絶望を感じた。世界がスローモーションになり、そして身体はやがて首元に来るだろう強烈な痛みに備えて石のように動かなくなる。

リオ様、ごめんなさい。ギュッと目を閉じる。涙が伝う。

グチャリ。――その水気を含んだ生々しい音は、ひなの身体から発せられる音ではなかった。

ひなは恐る恐る目を開ける。目の前にはさっき至近距離で自分を喰らおうとしていた狼の魔物が、飛沫や液体なしに倒れていた。

そして、Tシャツに動きやすそうな長ズボンを着ている、見知らぬの女の子――おそらく高校生だろう――が肩で息をしながら、その喉笛にナイフを2本突き立てていた。

金属のような臭いが鼻をかすめる。彼女のTシャツには、肩の辺りから血のシミが出来ていた。

そして彼女は力を使い果たしたのか。横にふらりと身体が傾くと倒れ込んでしまった。

あまりに突然の出来事に、しばらく状況が飲み込めないリオンとひな。ようやく状況を理解したリオンは、

「ひな、応急処置をお願い！　私は回復魔法を試みるわ！」

「わ、わかったよリオ様っ」

ひなはリオンの言う通りに、少女の容態を確認した。ひなの父は病院の院長であるため、聞きかじりの医療知識がひなにはあった。――まさかこうして、本格的に役に立つ

ことがあるとは思わなかったが。

リオンは得意な属性こそあれど、全ての魔法をそつなくこなすことが出来る。癒やしの光が、倒れている少女を包み込む――はずだった。

「魔法が……効かない……？」

リオンは違和感を感じて詠唱をやめた。回復魔法が少女にかからないのだ。もっと具体的に言えば、リオンは彼女に魔法が触れる際、その魔力が全て消えてなくなるような――なんとも気持ちの悪い感覚を感じた。

「え、嘘。……ほんとだ、魔力を受け付けない」

ひなも軽く魔力を当ててみる。やはり、少女の体に当てた途端魔力は打ち消される。

「何なのかしら。黒蝶石のような性質を持ってる？　いや、違うわね……」

黒蝶石とは、その名の通り黒光りする鉱石である。魔法使いの首に付けると魔力を放電することで魔法を封印する効果があるとされるが、既に放たれた魔法そのものを無効化するような効果はない。

「……とりあえず、この子の様子はどうかしら」

少し戸惑いながらも、リオンはひなに報告を促す。

「わかった、リオ様。えっと……まず脈と息はあるよ。それと血も止まってて失血の恐れもないから、応急処置は必要なさそう……あれだけの出血が自然に止まるなんて、

ちょっと不思議だけど」

ひなの丁寧な報告にリオンは新しい一面を見つけて感心した。さすがは病院の娘である。

「とにかく、多分疲れちゃって寝ちゃったんだろうね。一応、救急車は呼ぶべきじゃないかな」

ひなの言葉を聞いた上で、リオンは首を横に振った。

「この状況――多分、救急車は呼べないと思うわ」

辺りにはまだ、魔物の屍が散乱している。魔物の存在を一般人に知られるのは当然ながら避けるべき事態だ。

「じゃあ……高校の保健室……？」

「……そうなるわ、ねっ」

リオンは倒れている少女を肩に担いだ。特別致命傷ではないことが分かったため、多少乱暴でも大丈夫だろうという判断だ。

「お、っととっとと!?」

魔力で身体能力を補強し運ぶ算段だったが、それすら打ち消されて予想外の負荷にリオンはよろめく。

「だ、大丈夫？」

「大丈夫大丈夫。でも、この状態でも私の魔法が使えなくなるのは勘弁願いたいわね……」

少女の体重は軽く、魔力補強のないリオン一人でも運べそうであった。

リオンが少女を担ぎ、２人は警戒をしつつ裏路地を抜けて帝華高校へと戻った。

第2話　―提案―

「……ん……」

帝華高校保健室。リオンの手によって運び込まれた黒髪の少女は、程なくして目を覚ました。

血がついたシャツとズボンは着替えさせられており、帝華高校のジャージをとりあえず着させられている。なお、その時の彼女の身体には傷一つ見当たらないため、リオン達から状況を説明されても、保険医が救急車を呼ぶような事はなかった。

ちなみに、帝華高校の保険医は過去大きな病院で一線級の活躍をしていたという。また、保健室の設備も手術室や大掛かりな検査機器がないことを除けば、一流病院のそれと遜色ないレベルであるため、実のところそこまで病院に頼らずとも問題がない。

「あ、目を覚ましたよー！　リオ様、リオ様！」

「ひな？　あ……良かった、気が付きましたわね」

リオンとひなは、自分たちのピンチを救ってくれた彼女のことを見守っていた。

「あれ……僕は……」

誰にも聞こえない位、小さな呟きを発しながら少女はベッドから上半身を起こした。

少女はうつらうつらしながら左右を見渡す。カーテンで仕切られているものの、清潔感のある白い部屋。特有の匂いも感じる。病院のような場所にいるのだと把握するのには時間が掛からなかった。

「簡潔に説明いたしますね。よろしいですか？」

優しめな声色で、リオンは言う。少女は落ち着いたブラウンの瞳をリオンに向け、こくりとうなずいた。

「貴方は、魔物に襲われそうになっていた私達をすんでのところで助けて下さいました。ですが、その時に突然倒れ込まれて……辺りには魔物の死体が散らばっていて、到底救急車を呼べるような状況でなかったのもあって、ここまでお運びいたしました」

リオンはゆっくりと、丁寧な言葉づかいで経緯を説明する。同年代位とはいえ見ず知らず、しかも窮地を救ってくれた人間だ。自然体で話すのは些か気が引けた。

「あぁ……思い出してきました。そっか、限界だったんだ、僕」

少女はリオンの育ちの良さが溢れ出る丁寧な言葉づかいに、一瞬少し困惑した表情を浮かべた。

一方リオンはと言うと、少女が発する声が、あのときのイメージからかけ離れるくらい高めで透き通ってて可愛らしいもの、俗にいうふわふわ癒し系なアニメ声であったものだから少し驚いて目を軽く見開いた。ひなに至っては思わず、

「か、可愛い……」
　と、小声で口走るほどだった。
「まずは、わたくしどもからお礼を申し上げなければなりませんわ」
　リオンは一呼吸おいてすぐにきちっと切り替えた。そして、誠に感謝いたします、とリオンは誠意を持って礼をした。ひなもリオンに続き、ありがとうございますー、と相変わらず気の抜けたような声でお礼を言う。
「いえいえ、えっと……こちらこそ、ありがとうございます。その……助けて、いただいて」
　ベッドの上の少女はしどろもどろになりながら、軽く会釈をする。堅い口調に明らかに慣れてなさそうだ。
「リオ様ー、ちょっと丁寧過ぎないかな？　多分慣れてない人だよー？」
　その様子を見て、ひなが小さな声でリオンに話す。
「そう、かしら」
「あ、あのっ！　し、自然体で話してもらって、大丈夫……ですよ？　多分……同じくらいの人、ですし」
　少女の緊張度合いが凄まじい。身分の高い人であることを感じ取っているのだろう。
「……じゃあ、遠慮なくそうさせてもらうわね」

「は、はいっ」
「くすっ、そう緊張しなくてもいいわよ。あなたも私に対して、普通に接してもらって構わないわ？」
　かくいうリオン側も空気が弛緩するのを感じ、緊張感がほぐれて少し安堵した。ひなに、ありがとう、とアイコンタクトを取った。ひなはにへっと笑い、サムズアップした。
「う……うん、分かった。あ、名前言わなきゃ」
　少女はまだ身体が強張っているようだった。
「僕は、中島はやてって言います。高校２年生、だと思います」
「だと、思う？」
　ひながすかさずツッコミを入れる。
「うん、思う。……えっとね、僕……記憶がないんだ」
　はやては眉をハの字にして、苦笑しながら言った。
「え、ほんと？」
　困惑するひな。
「みたい。……思い出せないんだ、僕。」
　はやては、ゆっくりと、言葉を探るようにしながら続ける。
「確かに、あの、えっと何だっけ――そう、狼。狼のような化け物……？　それを仕留め

たことは、確かに覚えてる。……けど、何で僕がこんなことが出来るのか。そもそもどこから来たのか、どうしてあそこにいたのかまで――探せばキリがないくらい、何もかも、わからない」

そんなこと言っても、信じてもらえなさそうだけど……。はやてはそう、後に付け加えた。

「そうねぇ……よく分からないわね、正直。私とあなた、面識ないし……何より現実味が無さすぎて」

リオンは難しそうな顔を浮かべる。お嬢様として多くの交流を持つ彼女でも、記憶喪失を語る人と対面するのは初めてであった。信じてあげたい気持ちは山々だが――どう、気持ちを持てばいいのか分からない。

「ごめんなさい。困らせちゃう、よね」

申し訳なさそうにうつむくはやて。

「ううん、大丈夫。信じなきゃいけないところなんだろうけどね、私も」

「ひなも……うん、正直なところ、慎重になっちゃうかなー」

リオンとひなは顔を見合わせた。特にひなはある程度の医療知識があることも手伝って、より慎重な姿勢を取っている。

「でーも。ひな、あなたが悪い人だとは思わないよ?」

幾分かリラックスした表情で、ひなは言う。
「無理してまでも、ひな達のこと助けてくれたでしょ？　……あ、ひなは飛鳥ひなって言うんだー」
名前を言ってないことを思い出して、唐突に名前を紹介するひな。マイペースなひなに、はやてはちょっと失笑してしまう。
「あ、飛鳥さん、だね？」
「ひなでいいよー？」
「じゃ、じゃあひなさん」
「仕方ないなー」
ひなはふわりと柔らかく笑った。釣られるように、はやての口角も上がる。
「えっと。あなたの名前も、知りたい」
ひなのおかげで大分落ち着いたはやては、柔らかい表情になってリオンに言う。リオンは親しげに、はやてに対して返す。
「そうね、すっかり言い遅れてしまったわ。私は鷹宮リオン。ひなもそうだけど、あなたと同じ高校２年生よ」
「たかみや、リオン……うん。覚えた」
はやては嬉しそうに、その名前を噛み締めた。記憶を失ったというはやてにとって、

知り合いが出来るということは何よりも心強いことだった。

「あっ！　そうだ……ナイフ」

しかし、自分の服が着替えさせられていることに気が付き、はやては一気に青ざめた。こんな所で凶器であるナイフが見つかるのは、まずい。

「大丈夫だよー。運ぶ時にちゃんと、ひな達が預かっているから」

ひなは懐から、２本のナイフをこっそり取り出して見せた。真っ白い蛍光灯の色をそのまま写したように輝く、およそひなの顔ぐらいある刀身には、細かな傷一つなくついさっき魔物の喉笛に突き立てていたとは思えないほど美しかった。

ひなは自分で取り出しておきながら、その美しさに若干見とれていた。

「よかった……助かったよ」

はやては胸を撫で下ろした。出ていた冷や汗が引っ込み、白くなりかけていた顔色が元に戻る。

自分の生命線とも言える武器をリオン達が預かるのを確認して、はやては安堵している。そんな彼女の様子を見て、はやては対面して間もない私達のことを完全に信用してくれているんだ、とリオンは感じた。

そして、そのことがきっかけでリオンはある提案をする。

「はやて、と呼んでよかったかしら」

「うん。好きに呼んでいいよ」
「ええ、はやて。……良ければ、帝華高校に通ってみないかしら」
　え。はやても目を丸くしたが、一番驚いたのはひなだ。学費が非常に高いこともあるが、帝華学園の系列はその多くが幼稚舎から一貫して通っている者ばかり。途中転入はごくごく稀なことであった。
「そ、それって大丈夫なの、リオ様？」
「何言ってるのよ。お父様のお力があればなんとでもなるわ。身元不明なら、戸籍も作るわよ？」
　不可能などないとばかりに、リオンは少し自慢げに言う。窮地を救ってくれたはやてを見捨てるなんてことは、リオンのプライドが許さなかった。
「お父様の、力……？」
　はやては浮かんだ疑問点をすかさず突っ込む。
「ええ。私のお父様は政治家なのよ、無理を通せる力があるわ」
「で、でもそんなの悪いよ。僕なんかのために……」
　リオンの言葉に、はやては困惑する。その時。
「割り込み失礼するわね？」
　カーテンが開かれると、黒縁眼鏡を掛けている、高身長の白衣を着た女性――帝華高

校の保険医が顔を覗かせてきた。
「あ、浅田先生？　どうされたんです？　というか今の話、聞いていたり……」
リオンがやや面を食らった様子で質問するがそれに答えず、浅田先生と呼ばれたその女性はベッドの上にいるはやての瞳を真っ直ぐに見た。まるで吸い込まれそうな感覚をはやては感じた。
「……やはり。君は、今の帝華高校に必要な子よ」
「え……？」
３人はきょとんとして目を見合わせた。
「今から学校長さんに面会をお願いするよう連絡を取るわね。詳細はそこで聞いて頂戴？」
「あ、あの――！」
少し待っててね。はやての言葉を遮るようにそう言って、浅田先生はスマートフォンを取り出しながらカーテンを閉じて姿を消した。
「……何か、思った以上にすごいことになってなーい？」
ぼそりと、ひなが呟いた。
「そうね……でも、この様子なら帝華に通えそうね。ひとまずそれを喜びましょう、はやて？」

リオンはふっと力が抜けた様子で、目を細めてはやてに語りかけた。うん、とはやては頷き、頬を緩めた。

すっかり回復しきったはやてはリオン達と別れ、浅田先生に連れられ校長室へ向かっていた。

「……こんな所に、僕がいていいのかな……」

ぼそり、とはやては不安を漏らす。校舎内の装飾は絢爛豪華で、まるで貴族の屋敷にでもいるかのよう。時々すれ違う生徒も皆、令嬢や御曹司の風格があり、いかにも『デキそう』なオーラが溢れ出ている。周囲から聞こえる会話も、聞き慣れない言葉や話題がチラホラと。

帝華高校の特異性に、はやては少なからず圧倒されていた。

「そんなに不安がらなくてもいいわ。帝華の生徒たちは皆いい子よ。あなたを歓迎してくれるわ」

浅田先生は眼鏡越しに優しい言葉を掛けた。

「それに、あなたは場違いではない。ここ、帝華高校でも上手くやっていけるだけの力が

ある。……私はそう感じているのだけれどもね？」

浅田先生の言葉に、はやては何と言えばいいか分からず黙り込んだ。

「ふふ、無理も無いわ。……さて、着いたわよ」

校長室の扉は重々しい木の扉。その隣にインターホンがあり、浅田先生はそのボタンを押す。転入生候補が面会に来たことを知らせると、その扉に手をかけた。

「失礼しますわ。……どうぞ、入って」

はやては浅田先生に促されると、緊張によって少し震えた声で、失礼します、と言って入室する。臙脂色の絨毯が敷かれている校長室は広く、高潔感のある空間だった。

「ごきげんよう。楽にして構いませんわ、転入生くん」

出迎えたのはスーツを着た女性だった。浅田先生よりかは身長が低いもののスタイルは抜群であり、シュッとしたスマートな脚の上にある、美しい曲線を描くボディラインは同性であるはやてでさえドキッとさせる。

見た所３０後半にしか見えないが、まさかこの人が校長先生なのだろうか……？

「わたくしが帝華高校の校長を任されている宮咲（みやさき）ロサよ。よろしくお願いするわね？」

想像以上に若い校長だ。はやては内心驚きながら、宮咲校長が発する言葉の端々から上品さを感じた。

はやても自分の名前を言い、深々とお辞儀した。

「では、どうぞお掛けになって……浅田先生もどうぞ」
　はやては宮咲校長に促され、高級感溢れる黒革のオフィスチェアに座る。座り心地が抜群によく、一度座ると離れられないような感覚をはやては覚えた。
　それを見ると、宮咲校長はさらに高級そうな、いかにも校長が座りそうな椅子に座る。浅田先生ははやての隣の椅子に座った。
「まずは、帝華の生徒を助けていただいたこと、誠に感謝するわ。それで、早速あなたを帝華高校に迎え入れたい理由を説明したいのだけど……よろしいかしら？」
　はい、とはやては頷く。宮咲校長は柔和な表情で話し始める。
「では。まず、帝華の生徒を助けた恩に報いたいのが一つ。身寄りがないと聞いたものだから、こちらであなたの居場所を作りたいのよ。そしてもう一つなのだけど……」
　宮咲校長の表情が真剣なものに変わる。
「ここ最近、帝華高校付近の魔力が不安定なのよ。現在帝華大学の教授達に協力してその原因を調べてもらっているところなのだけど、今の所よく分かってないの」
　魔法を知っている者にしか通じない会話。宮咲校長は、はやてのことを完全にその関係者だと見ていた。
「あなたからは、他の生徒にはない『特異性』を感じる、と浅田先生から連絡を受け取ってるわ」

特異性。はやてに心当たりはなかった。何も考えずにナイフでの体術が出来るのも、傷が治療無しで完全に癒えるのも、はやてにはそれが当然のことだと思っているからだ。

「不思議そうな顔をしているわね。なるほど……あなたは、面白いわ」

宮咲校長の口角が上がる。

「あなたは今回の異変の鍵となる可能性を秘めているの。言い方は悪いのだけれど……私達としては、あなたを手元に置いておきたいのよ」

はやては唾を飲み込んだ。頭に喉の音が響く。

「力に、なってくれるかしら」

はやては、はい、と力強く返事をした。これからどうすればいいのか分からない時に手を差し伸べて貰ったのだ。

また、リオンやひながこの学校にいるのも理由の一つとなった。断る理由はどこにも見当たらなかった。

「気持ちのいい返事、ありがとう」

宮咲校長は心からの笑みを浮かべた。

第３話１　―学生寮の案内役―

幼稚舎から大学まで一貫で通うお金持ち学校である帝華学園への、はやての異例中の異例とも言える無償での編入が決まった日の夕方。身寄りのないはやては、学生寮にて暮らすことになった。

学生寮といえど、ここは帝華高校である。つまり――。

「……すっご」

学生寮を見上げたはやては言葉を失い、足がすくんだ。

オレンジ色の空を背景に漆黒の衣に身を包んだ堂々たる佇まい、まさしく高級マンションそのものである。入り口の屋根には、帝華高校の薔薇のエムブレムが輝いていた。これが本当に学生寮であっていいのか。

バーチャル界でも有数のお金持ち学校である帝華学園グループに通う生徒には、当然ながら両親が地方や海外にいる生徒も少なくない。とはいえ、御曹司や令嬢がそこから生活レベルを下げて一人暮らしをしてまで帝華学園グループに通うだろうか？

そこで、帝華学園グループは広い敷地を確保し、相応の学生寮を用意。最高級の家庭が持つ屋敷の一室にも引けを取らないに快適さや利便性、豪華さを持つにもかかわら

ず、一人につき一部屋を確保することを実現した。
そんなわけで、帝華学園の学生寮はかなりの人気を博している。学生寮目当てで入学を希望する学生や家庭もいる位だ。
人気があるのにもかかわらず空き部屋があるのはさすが帝華学園といったところだろうか。
「中島さんはこういうところ初めて？」
案内役として付けられた、はやてよりわずかばかり背の小さい少女が聞く。
清潔感溢れる白を基調とした帝華高校の制服に身を包み、深海のような青色のサラサラとした髪を、星が輝いているようなラメの入ったヘアゴムでポニーテールにまとめている。雪のような真っ白い肌の持ち主でもある彼女の名前は、七星（ななほし）　海（うみ）といった。
「そう。……というか、ここに来てから何もかも初めてだらけだよ」
「ふーん。変な、子」
そう言うと、海ははやての手をぎゅっと握って学生寮に入っていった。初対面であるのにもかかわらずその小さめな手でいきなり引っ張られ、はやては内心動揺した。
変なのは七星さんの方じゃ……？　そう思いながら、はやては自動ドアを通る。学生寮の自動ドアは、上部のカメラで顔を高精度で認証する。はやてのデータも既に登録済みである。

さらに、海は主導権は自分にあると言わんばかりに、エレベーターがあるのにもかかわらず階段を登り始める。
「な、七星さん？　エレベーターじゃダメなの？　だって僕、７階だよ？」
「待つのが、苦手」
あまり表情を変えずに返事をする海。何とも面白い子だな、とはやては海に魅力を感じていた。引っ張られるように階段を一緒に登りながら、はやては海に話題を振る。
「七星さん、えっと……ここにいる人達って、大体お金持ちの子だよね」
「うん。みんな親が社長さんだったり政治家だったり、芸能人だったり」
「七星さんの両親って何してる人か、教えて貰えたりするかな」
すると、海の足が止まる。それに少し遅れてはやても足を止め、海の顔を見ると、顔が分かりやすく曇っているのが分かった。
「……あんまり、言いたくない。ナナのコンプレックス、だから」
親がお金持ちということは、子供に課せられるプレッシャーも大きいということでもある。当然親を重荷に思う子もいるであろうことは、あまり考えなくてもすぐに分かることだ。
「そっか、ごめん」
「しつこくなくて嬉しい」

海は無表情で返すと、再び階段を登り始めた。しつこくなくて嬉しい、ということは過去にそういうことがあったんだなとはやては察した。お金持ち学校の定番、親自慢大会みたいなものが存在したらしい。

「七星さんの部屋は、どこ？」

「ナナの部屋は、隣。帰るついでに案内してって、頼まれた」

口数少なく、海は言う。ちょっと嬉しそうな雰囲気もした。

「そっか。七星さんのとこにも、たまに遊びに行きたいかも」

「まだ、早いよ」

言葉と裏腹に、海はまんざらでもなさそうな様子だった。

「えー、なんでさ」

「中島さんが、上品になったら」

「それはちょっと遠そうかなぁ……」

はやては、リオンやひなみたいな気品を身につけた自分を想像した。ごきげんようと言って、穏やかで美しい微笑みをたたえる自分。

……到底なれないなあ、と思わず苦笑いした。

「7……ここ、だね」

階段を上がり切ると、暖かな橙色の照明に照らされた、広々とした開放感のある廊下

が広がっていた。はやては特に何事もなく平然としていたが、海は少し息が上がっている様子だった。

「中島さん、疲れてなさそう」

口を少し開き呼吸を整えながら、不思議そうにはやての顔をのぞき見る海。綺麗で透き通った水色の瞳に、はやてのきょとんとした顔が映る。その距離が案外近くて、はやては少し後ずさりしてしまう。

「う、うん、全く……」

「どうなってるの？　ちょっと触らせて」

すると海はおもむろにしゃがみ込み、べたべたとジャージ越しにはやてのふくらはぎを触り始める。海の距離感の近さに慣れたのか、はやては受け入れておとなしくしていた。

はやての脚はまるでアスリートのような硬さで、がっちりとしていた。

「……男の子みたい。え？　まさか女装？」

「うわわっ!?」

突然、白く可愛らしい手がはやての控えめな胸をむに、と掴んだ。さすがのはやても思わずそれを振り払う。

「ちょ、ちょっと七星さんっ……」

「女の子だ……」

何か言いたげなはやてを意に介さず、海は感銘を受けた様子でぼーっとはやての真後ろで突っ立っていた。軽く頬を紅潮させ、心ここにあらずという感じである。

「……七星さん？」

目の前で手を振るはやて。何も反応がない。

「おーい」

はやてが海の肩をぽんぽんと叩くと、海ははっとして水色の目を見開き、正気に戻った。

「ぁ……ごめん、いこ」

「お、ととと」

海は顔をうつむかせもごもごと言いながらはやての手を引っ張った。海の歩く速度は、さっきよりもだいぶ速くなっている。ほどなくして、海が足を止める。

「着いた。ここが、中島さんの部屋。……じゃあね」

「あ、ちょっと、七星さん、待って——」

はやてが止める間もなく、海は自室のセキュリティを解除し隣の扉へと姿を消した。

「す、すごい子がお隣さんになったな……」

はやては失笑しながら、艶のある黒いドアに『中島　はやて』と上品な明朝体で書か

れてある表札カードがあるのを確認した。
そして、その隣にある静脈認証センサーに手のひらを置いた。ガチャリ、と鍵が開く音すら、どこか重みがあって高級感を感じる。
果てしない場違い感の中に、新しい世界に自らの手で足を踏み入れる高揚感をはやては感じていた。
一呼吸おいて、金色のバーハンドルに、恐る恐る両手でドアを握る。ひんやりとした金属の感触。手汗がにじむのを覚える。
カチャ、とドアを引く。ゆっくりと引いていくと、白の自動照明で照らされた玄関がはやてを出迎えた。黒光りした綺麗な石で敷かれている。
「うわ……」
今夜は絶対寝れない。そう確信めいた思いをはやては抱いた。

第３話２　―想い―

日はすっかり暮れ、夜の風に吹かれた木々のさざめきが聞こえる。屋敷に戻ったリオンはネグリジェ姿で自室にいた。

「……はぁ」

スマホ端末であるＭ―Ｐｈｏｎｅを片手で持ってＴｗｉｔｔｅｒでエゴサをしながら、天蓋付きの豪華なベッドにごろんと仰向けで寝転がる。Ｔｗｉｔｔｅｒでのエゴサで、自分やひなのことに触れているツイートや、ファンボーイからのリプライ、ユーザーからの創作物。これらを眺めて、心の中を満たしていく。もはやいつものことと化しているが、そのことがリオンの心のオアシスの一つになっていた。

しかし、あまりにも今日は色々ありすぎた。そりゃあため息だって出てしまう。時間と余裕があれば思いつきでゲリラ配信をすることもあるが、今日に限ってはとてもライブ配信をする気にはなれなかった。

魔物の発生と久々の戦闘。自分の実力が鈍らずにいたことにまずは安心した。おそらくここ最近増えだした魔法実践授業のおかげでもありそうだが。

だが……その後。油断しきって魔物の気配に気づかず、ひなを危険な目に遭わせてし

まった。あの時はやてがいなければ――そう考えると、リオンはゾッとした。
ひながいなくなる。そうそう起こらないと思っていて意識の外にあった悲劇の空想が、一気に現実味を帯びた瞬間であった。
そして、嫌なことに、あのときの光景は、はっきりと自分の脳内で再生ができるのだ。リオンはそのフラッシュバックを、空想に戻したい気持ちでいっぱいだった。
「ん……」
リオンは自室を暗くして、ディスコードでひなに通話をしようとした。何となく、ひなの声を聴きたくなった。ひなをなるべく近くに手繰り寄せておきたかった。
そうしないと、ふと、水の泡のように音もなく静かに消えてしまいそうな気がして――。空想に戻したいというのはあくまでも願望で、現実はやはり、あの一件がリオンの足首に巻き付いて、今まで感じたことのない不安の感情へと引きずりこみ続けていた。
『ぴよぴよー。どーしたの、リオ様？』
ほどなく、掴みどころのない、ふわふわとした声――いつもどおりなひなの声が電話越しに聴こえる。リオンは心底ほっとした。心地よいひなの音で鼓膜が震えると、少し目から涙が出そうになり、相当精神がやられてるな、と我ながら感じて苦笑いした。
「そうね。……ちょっと、ナーバス？　になってて」
配信では絶対に聞かせないような、自嘲の混じった少し弱気な声。寝転がりながら通

話しているのもあって、外にいるときの芯のある声とは大きなギャップがある。
『今のリオ様、すごくかわいい』
「うるさいー……」
『かーわーいーいー』
「むうー……」
からかわれても強く言えない。リオンには反論する余力がなかった。それくらい、リオンはふにゃふにゃになっていた。
『ひなにしか聞かせない？』
「聞かせるわけないじゃん、ばか」
『だよねー。こんなリオ様、外に出しちゃったらガチ恋勢が殺到してくるね？』
「うるさいうるさい！」
『リオ様さいっこぉ……♪』
ひなのからかいに、リオンは顔に熱がものすごい勢いで集中するのを覚えた。脚をバタバタさせて、身悶えする。正直すごく恥ずかしいけれど、なぜだかほんのり胸の奥に甘いようなものが生まれてくる。
ああ、これ、私ほんとおかしいな――。
『でー？　多分……あのときの、こと？』

ひなのスイッチが切り替わる。
「そうね」
細かい説明はいらない。あのときのこと、だけでお互い通じる。
「……それで、ひなが居なくなるのが怖くなって……繋がりたくなった」
素直になれるのは、寝転がっているのと、電気を消して部屋を暗くしておいたからだろう。恥ずかしいけれど、それでも今はひなに甘えたい。
か細い声になってしまうのは、もはや感情が外に出すためのフィルターに掛けられていないからだろう。
『……ひなも。リオ様に会えなくなるの、すごく嫌だ』
電話越しに聴こえてくるひなの声。聞き慣れたふわりとした声に、強いわがままに似た願いが確かに内包されていたのをリオンは胸の奥深くで感じ取った。
「ひな。怖い思いをさせて、ごめんなさい」
リオンは心に思うままに謝った。つっかえ棒が外れたみたいに、今のリオンは胸に浮かんだ言葉をすらすら言えてしまうような状態だった。
『ううん。こんなことで死ぬかもしれないというのは、魔法族に生まれたひなの宿命だから。だから、自分のことを自分で守れないひながいけないの』
ひなも同じようだった。リオ様、自分を責めないで。リオンには後ろに隠してあるそ

の言葉が、確かに読み取れた。
「ひな……」
『だから……ひな、強くなりたい。リオ様に悲しい思いさせたくない』
決意の強さが溢れる。
『でも、ひなが強くなるためには、まだリオ様に頼らなきゃいけないかな……』
少し悔しそうなひな。リオンの才能に対し嫉妬しているのではなく、ただ自分の純粋な無力さに悔しいと感じているのがひしひしと伝わる。
リオンはそんなひなのためなら、力を貸すのをいとわなかった。
「……わかったわ。ひなのためなら、ひなが私の隣にいてくれるのなら……私はどれだけ時間を割いても構わないわ」
『リオ様……!』
心の底から嬉しそうなひなの声を、リオンはしっかりと聴いた。胸の奥深くが、エゴサをしているときとはまた違った感情に満たされていく。
「ひな、あなたの味方は……この、鷹宮リオンよ」
自分の存在意義を再確認するかのように、リオンはひなと自分自身に言い聞かせた。
『知ってる。……ひなは、それがすごく心強いよ』
「ありがと」

『リオ様と幼馴染で、ほんとによかった。すごく、幸せ』
「……恥ずかしいわよ、もう」
『ふふふー。ひなも』
やがて、会話はいつもどおりの絡みに戻っていく。でも、リオンはこのやり取りを通じて、『ひなを守りたい』と、より強く刻み込まれたような、そんな気がした。

その夜、リオンは自分の枕を強く抱きしめて眠りについた。
――絶対に、私のそばから離さない――。

電気街異変編

第４話１　―溢れる歪―

謎多き転入生、中島はやてが帝華高校に編入してから3週間ほど経った、とある土曜日の午後。

「行ってらっしゃいませ、お嬢様♪　――ふふ、お料理褒められちゃった」

リオンは、バーチャル秋葉原の一角に存在するとある小さなメイド喫茶にてアルバイトをしていた。学校の休日、主に土曜日。社会見学のためのアルバイトである。

メイド喫茶は基本的にはリピーターを相手にする商売だ。そのため、リピーターとの交流が他の接客業以上にとても大事なものになってくる。

また、リオンが働くメイド喫茶はメイド自らが手作りで料理し、『お給仕』をするシステムとなっている。

なので、リオンがこのバイトを始めてからというものの、何だかんだコミュ力や料理の腕が上達してきている。屋敷にいる使用人の苦労もちょっとばかり知ることができ、実は社会見学という目的にかなり適しているアルバイトだったりする。リオン自身も、このアルバイトが嫌いではないようだ。

そして、リオンは学校の友人にバイト先を教えている。友人たちが見せる休日の顔や私服を見れるのも、リオンが思う楽しみの一つだった。

「お帰りなさいませ、おじょ――はいはい、来るの分かってたわよ」

……今来た身も心もぴよぴよしている子はもう見飽きているが。リオンのよそ行きの態度が一瞬で素に戻った。

「今日のリオ様、何だかいつもより笑顔が素敵だね？　何かあったのかなー？」

「な、何もないわよ。ほら、とっとと席行く！」

「はいはーい♪」

リオンのメイド服姿を見てふにゃふにゃしているひなの顔を見て、最近色々物騒なのにひなは相変わらずだな、とリオンは感じた。

はやてが転入してからというもの、特進クラスの雰囲気は少し緊張感のあるものとなっていた。魔物の出現報告が上がり始めたのだ。

リオン達は車での送迎なのであの一件以降遭遇していないが、徒歩で登下校する生徒のうち、特に強い魔力を持つ生徒が主に遭遇しているらしい。魔物の強さは遭遇する魔法族の持つ魔力に応じた強さになりやすいので、あまりにも魔物が強すぎるがゆえに大怪我を負った生徒はいないが。

「リオ様ー、いつものー♪」

席につくなり、ひなはメニューも見ずに注文をする。
「分かってるわよ、ミックスジュースとぴよちゃんパフェでしょ？　よく飽きないわね、毎週のように食べて」
「だってー、リオ様の手料理だしー？」
屈託のない笑顔。今のひなからは幸せオーラが全開で放たれている。私で幸せになるなら別に悪くない、とリオンは内心思う。
しかし、ちょっとばかりリオンからも言いたいことがあった。
「少しは他の料理も食べてくれると嬉しいのだけど。私がミックスジュースとパフェしか作れないみたいになるじゃないの」
毎週毎週ひなが来て注文するものだから、この２つが明らかに他の料理より手際よく出来てしまうのはリオンも割と感じつつあった。
「それもそっかー。じゃあ今度考えるねー？」
「……今日は結局いつもの？」
「あとチェキ１５枚ー」
「多い多い多い!?」
「だってメイド服を着たリオ様、可愛すぎていくらコレクションしても足りないんだもの」

そんなにメイド服が好きならばひなもメイド喫茶で働けばいいのに、とリオンはいつも思うのだが、ひな曰く『課金したい側の人間』らしい。リオンはその感覚がイマイチ分からなかった。

ひなからのオーダーを受け取り、リオンはキッチンへ向かう。最初のうちは戸惑っていたパフェ作りも、今ではもう慣れたもの。職人のようにテキパキと材料を乗せていく。

――が。

「う……」

リオンは突如、めまいを起こしてふらついた。キッチン台のへりにしがみついて何とか倒れずには済んだが、その場でしゃがみ込んでしまう。

「わ、リオンちゃん大丈夫!?　最近学校でちょっと無理してたりしてない？」

「あ、いえ、大丈夫です……心配していただいてありがとうございます」

「リオンちゃん頑張り屋だから、自分の身体には気をつけてね？」

「はい。ありがとうございます」

年上のメイドに心配されながらも、リオンは立ち上がって作業を続ける。あのめまいの感覚は、決して疲れから来るものではない。リオンの胸の奥で、もやもやした嫌な感情が湧き上がってくる。

――魔力が、おかしい。しかも……今までに感じたことが無いくらい、嫌な魔力。

「おまたせしました、ミックスジュースとぴよちゃんパフェです」

一応、出来上がったいつもの料理をひなの元へ持っていく。しかし、リオンよりは魔力に鈍感なひなも、その気味の悪さを感じていたらしい。ひなのふわふわとした笑顔はどこかへ行ってしまっていて、深刻そうな顔でリオンを見つめる。

「リオ様。……だいぶ、やばいと思わない？」

「そうね。あれほどの感触……ひな、覚悟を決めたほうがいいかもしれないわ」

「……分かった」

いつでも出られるよう、ひなはお金をテーブルに出した。そして、それなりにボリューミーなぴよちゃんパフェに物凄い勢いでがっつき始め、あっという間に平らげてしまった。

「リオ様。今日はチェキ、撮れなさそうだね」

「ええ。……多分、そろそろ何か――」

『おい！　逃げろ！　とにかく逃げろー！』

リオンの言葉を遮るように、店の外で男が大声で叫ぶのが聞こえた。次々と『化け物』『逃げろ』などと言う単語がごった返してくる。外がにわかに騒がしくなり、不安と動揺でざわめき出す店内。

リオンは決心した。ひなも、リオンの意を顔から読み取って頷く。
「行こう、ひな。これは、私達じゃないと何とか出来ないと思うわ」
「ひなはリオ様に、ずっとついていくよ」
リオンとひなは、出口に向かって駆け出した。当然、リオンはメイド服のままだ。
「すみません！　店長に外の様子見て来ると伝えて下さい！　あと、この子の代金はテーブルに置いてあるので！」
「え、ちょっと、リオンちゃん危ないよ……!?」
近くのメイドにリオンは軽く用件を伝え、制止を無視してリオン達は店を飛び出した。

第４話２　―駅前占領―

外では異様な喧騒の中、恐慌状態に陥った一般人達が駅の方から逃げてきていた。中には怪我を負って血を流している者もいる。

「まずいわね、これ……！」

嫌な胸の高鳴りを覚えながら、リオンはひなの手をしっかり握った。ひなも手を離さまいと、確実に握り返す。

逃げ惑う人達の流れに逆らい、魔力が溢れ出ているであろう場所に向かって全力で走る。歪んだ魔力の圧が次第に強くなっていくが、持ち前の精神力でなんとか耐え切った。

魔力の源――駅前広場までたどりついたリオン達が見た光景は、想像を絶するものだった。

「な――」

おびただしい数の、剣を携えた甲冑（かっちゅう）の魔物達が、広場を占拠して埋め尽くしているではないか。

本来、魔物は何らかの原因で空気中の魔力が異常に増えた上で、魔法族の持つ魔力に

呼応することで初めて出現する。その上魔物は魔法族相手には敵意を剥き出しにするが、一般人には全く見向きもしない性質を持つ。

それが、今起こっている事態は何だ。辺り一面魔物が覆い尽くし、その上一般人にも襲いかかっているではないか。リオンにとってこの事態は、まさに『信じられなかった』。

原因やら元凶やらを考える暇はない。しかし、このまま放っておけば取り返しがつかなくなってしまうのは考えるまでもなく明白だった。

もはや、リオン達には魔法使いであることをわざわざ隠しておく理由などなかった。リオンが短杖を、ひなが双葉のついた杖をそれぞれ取り出す。

「もう、戻れないわ。ひな……生き残るわよ」

「リオ様、分かった。……信じてて、ひなを」

お互いの顔を確認し、頷きあう。

「……行くわよ！」

リオンは短杖を巨大な鎌にし、一つ素振りをする。

「うん……！」

ひなは杖を自分の身長以上に大きくさせ、祈るように両手で頭上に掲げる。

甲冑の魔物の軍団は、魔法使いである二人を認識すると、今まで襲っていた一般人の

ことはお構いなしに、錆びついた金属の鈍い音をけたたましく立てながら、地面を震わせるような怒涛の勢いで銀色の津波のごとく襲いかかってきた。

「近づくな、雑魚共ッ!!」

リオンが鎌の柄を地面に叩きつけると、そこからまばゆい光の波が円状に解き放たれた。甲冑の魔物達は一瞬ひるみ、体勢が後ろに傾く。そのスキに、リオンは天高く跳び上がった。鎌がまとう光の軌跡を残しながら、美しく。

「三日月の刃、闇を切り裂け――消えて無くなれッ!!」

リオンは殺気に満ちた声で叫んだ。

滞空したまま甲冑の魔物達の塊に向かって、白く美しい光をまとった鎌を大きく横に薙ぐ。すると、鎌の刃から半月の形をした巨大な光の衝撃波が鋭く発射され、地面にいる甲冑の魔物達を真っ直ぐに貫いた。一振りで数十体もの甲冑の魔物が、鈍い金属音を上げながら砕け散った。

空気中に銀色の粉塵が舞い上がり、地面には甲冑の一部だった金属の破片がバラバラと落ちる。そのままリオンは光の粉を振り撒きながら、地面にふわりと華麗に降り立った。

「数が多いだけの雑魚、かしら。大したことないわね」

周囲に漂う魔力は確かに異常だが、魔物自体の強さはさほどでもない。それどころ

か、あの日遭遇した狼の魔物より弱いまである。いくら数が多いとは言え、質が悪すぎる。これくらいならどうにかなりそうだ。

「リオ様の言う通り。これならひな、でもっ！」

ひなは杖を両手でしっかりと握りしめ、迫りくる甲冑の魔物にハンマーのように思い切り叩きつける。

魔法使いが魔力の増幅のために使用する道具は、所有者にとっては羽のように軽く感じるが実際は非常に重い代物である。そのため、単純に鈍器として使用してもかなりの効果を挙げることが可能なのだ。

「あまり無茶はしないで、ひな！」

「大丈夫、リオ様に助けてもらえるような位置で戦うか、らっ！」

不意打ちのつもりだろうか、ひなの後ろから甲冑の魔物のうちの１体が鋼の剣を振り下ろした。

「ひなを、ナメないでっ！」

しかし、ひなはそれをたやすく杖で弾き、甲冑の魔物が体勢を崩したスキに、バットをフルスイングするかのように思い切り振り抜き、重い一撃をぶちかました。甲冑の魔物は後ろにいた数体の魔物を巻き込みながら、奥へ吹き飛んでいく。

「ひなも腕を上げたわね。強くなっているわ」

はやてが編入してからというもの、ひなはリオンの屋敷で使用人に戦闘術を学んでいた。

結果的にひなの魔力自体はあまり伸びなかったものの、その代わり魔力をあまり使用しない杖を用いた体術をある程度会得できた。

「リオ様に守られてばかりじゃダメだからね」

ひなは、少し自慢げにリオンに言った。

第４話３　―光の雨―

リオンとひなは、際限ないように思われた甲冑の魔物の軍勢を少しずつ削り取っていく。段々と地面に散らばる金属片が増え、魔物の密度もまばらになっていく。

「はぁっ！　――さすがにちょっと骨が折れるわ」

「だねー……わわ。リオ様とくっついちゃった」

お互いに背中合わせになる。二人共夢中で戦っていたせいか、気がつけば周囲は魔物だらけで完全に包囲されてしまった。当然、二人にとってこれだけの数の魔物を相手にするのは初めてのことだ。

しかし――二人の脳内に絶望の文字は、どこにも見当たらなかった。

「ひな、不思議と力が湧いてくるの」

ひなは杖を両手で握りしめる。

「私もよ。今の状況、全然怖くないもの」

リオンは光をまとう鎌を肩に担ぐ。いつでも来い、と言う気概を持って。

ほんの少しの静寂の直後。甲冑の魔物の大群が、まるで示し合わせたかのようにタイミングを合わせて、二人目がけて全方位からなだれ込んできた。

「甘いわね、逃げ場はあるのよ！」
リオンは地面を蹴り、大きく跳躍した。
「空を舞い、我を導け――風の鳥（ウインド・バード）！」
ひなは詠唱し、美しいエメラルド色をしたミニバン位の大きさの巨大な風の鳥を実体化させる。ひなはその背中に座り、空中へ飛び立つ。
攻撃対象が一瞬で空に逃げたことにより、甲冑の魔物たちは反対側から来る魔物に真正面からぶつかり合い転倒する。
「リオ様、こっち！」
ひなが作り出した風の鳥に、リオンが飛び乗った。２人を乗せても風の鳥は安定して低空を舞っている。
「あ、ありがとう。ひな、いつの間にこんな魔法使えるようになったのかしら」
「今、出来るかなって思ってやったら出来た」
「天才か。……何にせよありがとう、あとは私に任せて」
この場所からなら、詠唱に時間のかかる大技も問題なく撃てる。そして、今から放つこの大魔法で、おそらく駅前広場を覆い尽くす魔物達を一掃出来るだろう、とリオンは踏んでいた。
リオンは目を閉じ、神経を集中させる。魔法のイメージを緻密に思い浮かべ、息を

ゆっくりと吐いた。そして、緩やかに、白くおぼろげに光る大鎌を天に向かって掲げる。

リオンの唇が、詠唱の言葉を発し始める。

「純なる煌めきを帯びし、尖鋭なる光よ――」

リオンのゆっくりとした呼びかけに、空がほのかに白く輝き始める。金色のツインテールが魔力の波動に揺られてなびき、空の柔和な光に照らされ輝く。メイド服のフリルスカートもはためき、魔力がほとばしっていた。おぼろげだった鎌が発する光の輝きも、詠唱が進むにつれて次第に増していく。

「遥か彼方の天空より雨飛し、無数の矢と化して――」

地面では攻撃対象を見失った甲冑の魔物達が明らかに混乱した様子で、ガチャガチャと鈍い金属音を立て、衝突を繰り返していた。ひなは下から詠唱中のリオンに向かって飛びかかってくるのを警戒していたが、その心配はいらなかった。

「存在を許されぬ魑魅の骨身を穿て！」

リオンが最後まで詠唱を終えると、大鎌の持つ純白色のまばゆい光が、天高く飛び立ち、粒子となってばらばらに弾けた。空の輝きが一層強くなる。

――まるで、時間が止まったかのような一瞬の静寂――。

「――これで、雑魚共は全て消える」

リオンがそう呟いた瞬間、きらびやかに発光する無数の光の雨が、虹を携えながらゲ

リラ豪雨のごとく激しく降ってきた。光の雨は駅前広場に余すことなく降り注ぎ、混乱して右往左往している甲冑の魔物達に容赦なく打ち付け、鋭く貫いた。

光の雨に少しでも触れた甲冑の魔物達は、まるで金属が一瞬で気化するかのように簡単に消えていく。地面に散乱した金属片も全て、光の雨によって蒸発して、正常な魔力へと空気中に還元されていった。

一瞬の出来事だった。リオンの『光の雨』によって、駅前広場を埋め尽くしていた甲冑の魔物の軍団は、塵芥（ちりあくた）一つ残さず跡形もなく消え去った。

「ひ……な……」

大魔法を撃ち、魔力と体力を使い果たしたリオンは、風の鳥の上でふらりとひなに倒れかかる。ひなはリオンを優しく受け止めた。

「リオ様。かっこよかったよ」

リオンの頭を優しく撫でるひな。普段はそんなことをやるとすぐにその手を払いのけるリオンだが、今はそれを受け入れた。

「ありがと。……あとは、よろしくね」

リオンのまぶたが落ちると、すぐに寝息を立てて深い眠りに入った。ひなはリオンの頭をなでながら、風の鳥を人が少なそうな路地裏に着陸させた。風の鳥は無数の美しい羽毛となって、空気中へと消えていった。

「んー……何か、いつもより目が冴えている気がする……」

眠くならないことに、ひなは首をかしげた。

ひなは普段、少しでも魔法を使うとすぐに眠ってしまう。しかし、なぜだか今日は眠くならない。それどころか、むしろいつもより眠れなさそうまである。

わずかばかりの違和感を感じながら、ひなはリオンを近くにあるベンチに寝かせた。寝息を立て、すやすやと気持ち良さげに眠るメイド服のリオン。ひなは自分の膝にリオンの頭を乗せてあげた。

んんぅ、と眠りながら声を漏らすリオン。メイド喫茶に来たときのツンツンしたリオンの姿はどこにも見当たらなかった。

「……かわいい」

ひなは小さい頃からリオンと一緒にいたのだが、こうやってしっかりとリオンの寝顔を眺めるのは中々なかった。その逆なら、ひながしょっちゅう昼寝をするせいでいくらでもあるのだが。

起きないことをいいことに、リオンの頬に軽く触れる。ふにっとした柔らかさと、きめ細やかな肌の質感が指先から伝わってくる。

「リオ様、肌きれいだなぁ……」

ひなはフリルスカートから顔を覗かせている太ももに目を向ける。色白の肌は透き

通っていて、もちもちとした見た目にひなは手が出てしまいそうになる。
しかし、その魅惑の太ももに触ってしまえば、リオンへの『好き』の意味が変わってしまいそうな気がした。ひなはそれに危機感を覚えて、すぐに太ももから目を逸らした。
「あ、そうだ。チェキが撮れなかった分、だからね……♪」
ひなは思い出したようにＭ―Ｐｈｏｎｅを取り出し、カメラでリオンの寝顔をカシャリと撮った。
もちろん、きっちり１５枚である。

第５話１　―校長の状況説明―

リオン達が秋葉原に出現した、大量の魔物を一掃した翌日。あの一件はニュースとなり、大々的に報道された。ＳＮＳでも話題となり、特に虹がかかっている光の雨の中をメイド服姿のリオンと私服姿のひなが緑色の巨大な鳥に乗って飛んでいる動画が出回っている。

リオンとひなは、お昼休みに校長室に呼び出されていた。二人揃って、校長室にある黒革のオフィスチェアに座っている。さすがに２人とも、緊張した面持ちだ。

「気を楽にして頂戴。あなた達を叱るつもりはないの」

宮咲校長がそう呼びかけても、リオン達の緊張は抜けなかった。校長室に呼び出されるなんてことは滅多にないことなのだから、当然だ。

「校長先生。秋葉原のこと、ですよね」

リオンが心配であることを隠しきれない様子で聞く。ひなはリオンの横顔を不安げにちらりと見やり、すぐに宮咲校長へと目を戻した。

「……ええ、そのとおりよ。例の秋葉原の一件、よく頑張ったわ。表立って表彰することは出来ないのけれど、あなた達の活躍は帝華としても誇らしいことよ」

宮咲校長が、リオン達の緊張がなるべく解けるようにと、柔らかな口調で語りかける。
「あの。……魔法を行使してしまった件については、大丈夫でしょうか？」
リオンが、彼女の一番不安に思っている点を質問した。
今回の件で、魔法使いの存在がメディアを通じて大々的に広まってしまった。魔法使いには、魔法の使えない一般人に対してその力ゆえに疎まれ、そして一般人の手で、また魔法使い同士によっても淘汰されてきた歴史がある。リオン達は当然その歴史を知っており、それ故に魔法使いバレをすることを恐れていた。現に今、バレてしまった訳だが――。
「もしあなた達が魔法を使うことを渋ったら、おそらく被害はもっと拡大していたでしょう？」
宮咲校長の言葉に、リオン達は小さく相槌を打つ。それを確認して、宮咲校長はゆっくりと言葉を続けた。
「魔力を持つ者には、その力を適切な場所で行使する義務があるとわたくしは考えているわ。そして、あなた達は魔物の大量発生という魔力を使わねばならない事態に遭遇したのよ。……何も後ろめたいことはないわ。むしろ、誇るべきよ。正しい場面で正しく魔力を行使したのだから」
リオンはどうリアクションすればいいのか分からず、とりあえず「ありがとうござい

ます」とだけつぶやくように言った。ひなも、それに続くように言葉を言う。
「……さて。今回の事件の詳細なのだけど……特進クラス内にて、一応ざっと説明はされているわよね？」
　話が切り替わることで、リオン達の少しだけ表情が和らいだ。
「そうですね。昔に同じような、魔物が大量発生する事件があったということを聞きました」
「ええ。その時に聞いた話もあるかもしれないのだけど、大事なことだから私からも話させてもらうわ」
　一呼吸おいて、宮咲校長は説明を始める。
「１７世紀前半のことね。スイスで、突然魔物が局地的にに大量発生して、一般人を襲い壊滅的な被害をもたらした事件があったのよ。で、その犯人は過激派の魔法使いだった。歴史で習ったでしょうけど、その時はちょうど魔女狩りの最盛期なの。非魔法使いに対して、並々ならぬ恨みを持っていたのでしょうね」
　魔法使いにも派閥がある。大きく分けて、魔法で非魔法使いを支配しようと目論む派閥と、非魔法使いに寄り添い共生していこうとする派閥の２つがある。前者が過激派、後者が穏健派と俗に呼ばれており、魔女狩り等で魔法使いの数が大きく減少した現在では、その大半が穏健派と呼ぶべき思想を持つ。

当然ながら帝華学園グループも穏健派であり、それに則って特進クラスの授業内容は組まれている。

「さて、昨日の事件なのだけど……間違いなく魔法使いの仕業でしょうね」

宮咲校長の顔が真剣なものになる。しっかりと伝えるように、言葉を紡ぎ始める。

「実は、過激派に属する魔法使いの仕業だろうと思われる事件は現代でもあるにはあるのよ。でも、犯人の魔力が大したことがなく、魔法使いではない警官でも容易く逮捕出来てしまうケースが多数だったわ。……しかし、今回の事件は違う。質こそ悪いものの、あんなに大量の魔物を使役できる魔法使いはそうそういない。それにターゲットは魔法使いでなく大勢の一般人。質より量を取ったと考えると、一般人への殺意もかなり高そうだわ」

こう話を聞かされると、相当危険な魔法使いと直接ではないが対峙してしまったのだと、リオンは危機感を覚えた。

「現在帝華学園でも独自で事件を追っているのだけど――今回の事件の犯人は、言うまでもなく非常に危険よ。あなた達に復讐しに来る可能性も充分にあり得るわ。その時、学園があなた達を守れるとは限らない。……常に警戒を怠らないことね」

宮咲校長の言葉に、リオンとひなは硬くうなずいた。

第５話２　―はやての日常―

月曜日の放課後。窓際に座るはやては、外の空を見ていた。

重々しい、鈍い灰色をした曇が空一面を覆い尽くすような、そんな日。決して気持ちは晴れないが、しかし不思議と落ち着く。はやてはこの天候が、少なくとも雨よりかは好きだった。

帝華高校に編入してから3週間。はやてはリオン達と同じ特進クラスに入った。はやては魔法こそ全く使えないが、戦闘要員として期待されている面があるため魔法に関しての授業を受ける必要があると判断されたからだ。特進クラスへの途中編入も異例だが、魔法族でない生徒が特進クラスに入るのも異例中の異例である。

はやては何とか授業についていけることが出来ていた。記憶喪失の影響で最初の方は苦戦を強いられていたが、教員の配慮もあってか今ではだいぶマシになってきた。単位制という制度に幾分か助けられている面もある。魔法が使えないゆえに、魔法実践の授業は当然見学だが。

「はやて様、お疲れ様ですわ！」

「あ、ミサさん。お疲れ様」

はやては自然体のまま、クラスメイトに軽く腕を上げて会釈した。

はやてとクラスメイトとの関係もわりかし良好である。体育の時に見せる超人的な身体能力に魅了される人が続出し、リオンのような感じの人気を集めつつある。もっとも、身分が高い人間ではないため振る舞いに上品さはなく、授業についていけるとは言え勉強面は下から数えたほうが早いため、ファン層は分かれている傾向があるが。

再び視線を窓の外に向ける。灰色に敷き詰められた空が少しずつ動いていくのを、ただただぼーっと眺めるのは不思議と退屈しない。

「てい」

不意に頬を指でつつかれる。んぅ、と声を漏らして、はやては気だるげにその方へ向いた。

「風紀委員室いこー?」

振り向けば、そこには大きな白いリボン。相変わらずぴよぴよな空気を漂わせているひながいた。

リオンとひなの仲も当然ながら良好。風紀委員をしているリオンを風紀委員室から眺めるのがひなの日課だったが、最近はそこにはやてが加わることも多い。もっとも、はやてはリオンだけを見ている訳ではなく、ただただぼーっと空や人の流れを眺めているのだが。

「あー、ごめん。今日はこの後すぐ用事があって……また、今度ね？」
そして、今日のように『用事』があって断ることも少なくない。
「用事……あー、例の？　あまり心配してないけど、一応気をつけてね？」
「分かった。気を抜いたことはないからね」
「はやてちゃんかっこいいー。リオ様ほどじゃないけど」
「あはは、僕もリオン様の戦いぶり生で見たかったなぁ」
「リオ様、あの時もほんとカッコよかったから！　すぱーん、って空たかーくジャンプするんだけど、その時綺麗な――」
「え、えっと……用事が……」
発作が起きかけたひなを制止して、ひなと別れる。
「……よし」
はやては自分に気合を入れるように小さくつぶやくと、鞄を持って立ち上がった。

第5話3　―極秘任務―

とある廃倉庫、時刻は夕方。雲に通された灰色の光が、外から差し込む。中は薄暗く、壁にはサビがはびこっていた。

こつ、こつ――と、一人のゆっくりとした足音が倉庫に反響する。その両手には、2つの大きめな刃を持ったナイフが握られていた。

不意に足音が止まる。一つのナイフは、出入り口の一つの方向へ向けられた。

「海。――そこにいるの分かっているよ」

そこから顔を出したのは、およそこの場に似つかわしくないような背の小さい少女だった。七星海。学生寮にてはやての隣室に住む高校2年生で、同じ特進クラスの生徒。

「見つけてくれると、思ってた」

倉庫に響く、海の声。彼女はクラスでも全くと言っていいほど目立たない生徒だ。

「見つかるの前提で来てるのなら、わざわざ尾行しなくたっていいのに……」

「ナナを見つけてくれるのが嬉しいから、内緒にしてる」

海は、2本のナイフを持った少女――中島はやての元へ駆け寄る。海の両手首に巻か

れた水色のリストバンドが、じわりと光り始める。
「……はやて、来るよ」
海がそう呟いた直後。二人が見つめていた場所に、紅のもやが不気味に現れる。そのもやは瞬く間に濃度が増していき、やがて２．５ｍ位の人の形を模していく。
「……撤退しよう」
「え？」
「多分、甲冑の魔物だと思う。僕の武器のナイフじゃ分が悪い」
はやては、海の手を無理やり取って駆け出した。――しかし。
「おっと。ここは通さない、ネー」
入り口付近に張っていたスーツの男から、拳銃を突きつけられるはやて。その男からは、魔物と同じような気味の悪い紅のもやが出ていた。
「君の対策は万全なのだ、ヨ。『副産物』クン。ナイフで金属は壊せ、ナイ。そう、ダロウ？」
舌っ足らずな口調で、血走った目でギロリと睨みつける男。はやては海と共に距離を取る。後ろにいる、大きめの甲冑の魔物の気配を感じながら。
「……多分、秋葉原の犯人だ。甲冑の魔物の使役者……」
はやては海に向かって、真剣な口調でつぶやく。海の喉が動き、汗が伝う。

「正直、海がいて助かった。魔物への攻撃は頼んだ」
「分かった。はやてのためだもん、ナナは頑張るよ」
海は目を閉じ、深呼吸をした。深い青色をしたポニーテールが魔力の波動によって浮かび、激しくなびく。
その姿を見て、はやては海に背中を預けた。
話が通用しないのは明白。ならば、不必要な会話など交わす意味がない。はやてはスーツの男に向かって一瞬で距離を詰めにかかった。
「見くびられたものだ、ネ！」
はやてのナイフが男の首元を捉える数ｃｍのところで、男ははやての後ろに回り込み、即座に発砲した。はやては振り向きざまに弾丸をナイフで弾き、再度距離を取る。
「はやて!?　そっちはダメ！」
しかし、飛び退いた先が悪かった。後ろで海と戦闘中である、甲冑の魔物が今まさに振り下ろしている、２ｍはあろうかという巨大な剣がちょうどはやての頭上にあった。
「なっ――――！」
辛うじてはやてはギリギリのところで横へ転がってかわした。振り下ろされた剣はコンクリートの床をえぐり、破片を飛び散らせた。
「位置が悪い……1対1を確実に作らないと」

はやては再び、スーツの男に向かって果敢に距離を詰める。何発か拳銃を撃たれるが全てそれを弾く。間合いを詰め、圧力を掛けることで男の位置をある程度コントロールするという寸法だ。

銃弾を弾き、ナイフを突き出す。それはいとも簡単に避けられるが、これは倒すためではなく攻撃対象をこちらに向け続けるための策。位置はじわじわと、魔物と海から離れていく。

「ありがと、はやて。……地より昇れ、蒼の奔流」

はやてのヘイトコントロールのおかげで、海は甲冑の魔物に集中することが出来ていた。海が小さく詠唱し、青くまばゆい光を発するリストバンドの軌跡を残しながら左手を上に振ると、魔物の足元から次々と間欠泉が湧き、鋭く貫いていく。

しかし、攻撃こそ当たるものの甲冑の魔物は非常にタフで、効いている素振りをあまり見せていない。海の攻撃を全て受け切ると、甲冑の魔物は即座に海に目掛けて斬りかかってくる。

しかし、甲冑であるゆえか動きは遅い。頭から真っ二つにしようと斬りかかって来たが、海は簡単に避けることが出来た。

「っ……水蛇の如く、地を這え激流」

海は別の魔法を試す。地面を掬い上げるように左手を振ると、そこから海の身長ぐら

いの高さを持つ水の衝撃波が飛沫を上げながら魔物に突き進んでいく。甲冑の魔物に当たるが、少しよろけるだけ。即座にその重い剣を叩きつける。

「終わりが見えない……！」

海は魔物の一撃を軽く後ろに下がってかわすと、険しい表情を浮かべた。海が水属性の魔法を放つ。魔物はそれを受けつつも、何ともないかのように重い剣を振るう。そして、海はそれをかわして再び魔法を放つ――まるで、終わりのないループのように見えた。

「はぁ、はぁ、っ……！」

先に疲弊したのは海の方だった。魔法の勢いは目に見えて減り、有効打を与えられなくなってきている。もはや海が放つ魔法が魔物に直撃してもよろけず、むしろ魔物側が振るう剣の勢いが増しているかのようにも見えた。

「私は、もう……ごめん……」

海の動きは次第に鈍り、とうとうその場から動けなくなった。甲冑の魔物はそれを逃さず、剣を海の頭上から振り下ろす。

その時、スーツの男と交戦中のはやての脳内に映像が流れ込む。甲冑の魔物が振るう剣の一撃が、疲弊しきっている海に直撃する。

それを受け取るや否や、はやてはスーツの男から離れ海の元へ駆け出す。

「っ……！」

はやては海に抱きつき、一緒になって横に転がる。甲冑の魔物の一撃を間一髪の所でかわし、海も無傷だ。

「フフハハハ……もう終わり、カネ？」

スーツの男の声が、廃倉庫で不気味に響く。コツ、コツ……と革靴の音が不規則に近づいてきた。はやては海をかばいながら、男を鋭く睨む。

「どうせ、君たちは、これで、終わりだが、ネ……!!」

男はスーツの胸ポケットから不気味な紅のオーラをまとった赤い石をつまみ、これ見よがしにはやてに見せつける。そしてその石を地面に落とすと、革靴で思い切り踏みつけ、粉々にした。

すると、その不気味な紅のオーラが辺り一面に充満し、そこからまるで雑草が生えるかのように次々と甲冑の魔物が生まれてくるではないか。しかも、大きさは海が戦っていたものと大差ない。

これは、絶望である。はやてはハッキリと自覚した。

第5話4　―レクイエム―

はやて達は、男が紅の石を割ることで大量に現れた大型の甲冑の魔物達によって完全に包囲された。

これはもう、勝ち目がない。魔力を使い果たし眠りについた海を抱きかかえて、はやては即座に逃げる体勢を取った。

はやてを狙って、魔物達は一斉に剣を振るう。石が割れたことによって発生した紅の霧の中、はやては時折流れる脳内の映像も頼りにしながら、その一閃一閃を的確に避ける。ある時は姿勢を低くし、ある時は上を飛び越え――腕の中にいる海の様子を気にかけながらも、普段の時と比べても決して劣らない速さで出口に向かっていく。

「逃さナイ……！」

しかし、その出口目前だった。地面に充満する紅いオーラから、出口を封鎖するように突如として甲冑の魔物が現れる。それも、絶対に逃さないというスーツの男の意志を顕したかのように、複数の魔物がズラリと壁を形成した。出口からの灰色の光はほぼ完全に遮られた。

「っ……！」

突然の事態に、はやては思わず足がすくむ。魔物の、目の前で。

「シネェェェ!!」

映像は、認識できなかった。

耳をつんざくような男の奇声。すると今までの緩慢さからは想像もつかないような攻撃速度で、魔物は刃渡り２ｍにも及ぶ大剣を横に薙いだ。

はやては海をかばうようにとっさに背を向けるのが精一杯だった。

「――っ!!」

激痛。背骨が軋む音を聞き、重力の感覚を失う。背中が焼けるように熱い。宙に飛ばされ、天と地が入れ替わり続ける。そのまま天井に頭から激突し、銃で撃ち落とされた鳥のように地面へ落下する。

その最中、乾いた破裂音を聞いた。刹那、左ふくらはぎに痛みが襲う。追い打ちの銃弾が１発脚を貫いたのだ。はやては赤い軌跡を空中に描きながらコンクリートの地面に墜落する。身体からはどす黒い血がどくどくと滲み出てくる。

それでも、海の身体は離さなかった。はやては、海を上側にして地面に落ちた。はやてが血に塗れようと、傷一つ付けなかった。

「シネ、シネ、シネシネシネシネェェェェ!!」

頭脳が吹っ飛んだかのような狂いようで、男は金切り声を上げ続ける。甲冑の魔物達

が地面に落ちたはやて達を囲み、一斉に剣の刃を下向きにして振り上げる。はやては痛む身体を気力で無理やり動かし、海を抱き込んだ。

――その時だった。

上方から衝撃音が響く。瞬間、地面が激しく揺れた。一つの地点から広がる光と爆風が辺りを瞬く間に覆い尽くし、倒れ込んでいるはやて達に群がる甲冑の魔物達だけを吹き飛ばす。

廃倉庫の天井には穴が開き、灰色の光が差し込んだ。衝撃で爆心地付近からコンクリートの煙が巻き起こる。煙越しに見える女性の影はツインテールをたなびかせていた。

それは、まるでヒーローの如く。

煙が消えると、煌々とした白の制服に身を包んだ美少女が一人立っていた。その美貌に、およそ似つかわしくない巨大な鎌を携えて。

そして、少し遅れてもう一人。緑色の羽毛を周囲に舞い散らせながら、小柄で可憐な少女は両手にリボン付きの杖を抱きながらふわりと着地した。

「リオンさま……ひな、ちゃん……？」

おぼろげな意識の中、はやてはその少女達の姿を認識した。微かに動く唇からは、血液の筋が一つ。

「はやて……!?」
「はやてちゃんっ……!」
　満身創痍のはやてを見て、リオンとひなは真っ直ぐ駆け寄る。二人が来るのを確認すると、安心したのかはやては、か細い糸一本で繋ぎ止めていた意識をぱっと手放した。
「ひなが今、助ける……!」
「でも、はやてには魔法が……」
「可能性に賭けたいの、リオ様!」
　ひなはリオンの制止を聞かず、身長ほどもある杖を両手で持ち、天に掲げる。こういう状況なら、魔法を使っても眠らない。秋葉原の一件で、ひなはそう確信していた。
「煌々と燃ゆる火に我が身を投じ、新たなる生命を宿す――不死鳥（フィーニクス・キュアー）の施し!」
　はやての周囲を優しい炎が包む。本来なら、そのまま炎が身体の傷を癒やすのがこの魔法だ。しかし、炎がはやての身体に触れた瞬間、ぱっと消えてしまった。
「え……」
　呆然。最近ひなが使えるようになった渾身の回復魔法。……それさえ、効かなかった。
「……ひな、集中して」
「でも、こんな傷絶対に――」

「いいから集中して！」

リオンはひなに対してものすごい剣幕で怒鳴った。感情のまま暗黒の波動がリオンから発せられ、魔物達をひるませる。

「リオ様……」

「私達まで死んだら何の意味もないの！　分かる!?」

リオンはコマのように回転しながら闇の力をまとった大鎌を振るい、何重もの黒い衝撃波を生み出す。ひなには、リオンの目から光るものが溢れ出てきていることがはっきりと見えた。

「今は目の前の敵を何とかするの！」

リオンが生み出す数多の黒い衝撃波は、甲冑の魔物達の動きを止め続ける。そして、その回転の勢いのまま、まず一体――海と戦い、疲弊していた個体――を横に両断した。

しかし、やっと一体である。絶望的な状況には変わりなかった。リオンは敵の攻撃が届きにくい空中をうまく使い撹乱しつつ、感情に任せた闇魔法の攻撃を加えている。

一方ひなは、地上で奮闘していた。相手の大剣を真正面から受け止めては弾き返し、フルスイングで甲冑を凹ませる。小柄な体格を活かし、懐に潜り込んで痛烈な一撃をお見舞いする。

「忘れてもらっては、困る、ネ！」

スーツの男が放つ銃弾が宙を舞うリオンの左頬をかすめる。
「っ……るさいッ！」
リオンは怒りと悲しみの混ざった感情を増幅させる。空中からありったけの闇の力をまとった大鎌を上に振り抜くと、暗黒の衝撃波が地面を突き進んで一直線上に並んだ魔物達を切り裂いて真っ二つにした。
しかし、リオンはあまりにも冷静さを欠いていた。
「……はぁ、はぁ……っ!?」
「リオ様!?」
後スキを晒したリオンを、攻撃を免れた魔物の大剣が襲う――はずだった。
「リオ様――っ！」
ひなはリオンのピンチを見逃さない。全力のフルスイングを魔物にぶち当て、ひるませる。そして――杖を天高く突き上げ、周囲の紅の霧を吸収し始める。
「リオ様。七星さんを抱えて避難して！」
「ひな……？」
「膨大な魔力を感じるの……このままだと、リオ様も巻き込んじゃうと思う」
ひなの杖にみるみる紅の霧が集まり、妖しい光を放ち始める。ひなの言う通り、リオンはひなに魔力が大量に溜まっていくのを感じ取っていた。

「分かったわ、ひなを信じる……はやても信じよう、どんな魔法も効かないはず」
「リオ様、ありがとう」
リオンは昏睡状態の海だけを抱きかかえて高く飛び上がり、屋根に空いた穴から脱出した。
「何をす、ル、気だ、ネ？　多勢に、ブゼイ、お前はどうあがこう、ト、死ヌ」
「――ひなは、死なない」
声色が変質したひなに、紅のオーラがまとう。緑色の彼女の瞳は紅い輝きを放ち、溢れ出る魔力でひなの周囲に風圧が発生し続ける。
「これは、ひなの怒り。ひなの悲しみ。あなたは、みんなに酷いことをした。だから……その何倍もの痛みを、苦しみを、あなたに味わってもらうね」
倉庫内にて、赤黒い雲が発生しはじめる。そこから赤い雨がぱらぱらと降り始め、やがて滝のような雨となる。
紅の雨は倉庫内全域を覆い、甲冑の魔物を文字通り全て溶かした。
「ウッ……グゥウッ……やめ、ロ……！」
スーツの男も雨に打たれて悶え苦しむ。ひなはひざまずくスーツの男に向かって、ゆっくりと歩いた。
「ヤメ、ロ……ッ！」

「やめないよ。ひなはね、本当に怒ってるから」
ひなが歩を進める度に、ミシミシとコンクリートの床にヒビが入る。魔力がより強くなったのだ。
「あなたは秋葉原で、たくさんの人を苦しめたの。身体だけじゃない、心もだよ？　……それが全部、あなた一人の元に返ってきてるの。今、ね？」
「ヴ、ガ……グ……」
ますます雨は強くなる。スーツの男は四肢を溶かされ、胴体と頭だけになっていた。
「そろそろ、おしまいにしてあげようかな」
紅い雨がぱっと止む。男には抵抗する力どころか、物を言う力さえ残ってなかった。
「サヨナラ」
赤黒い雲から紅の細い雷が一つ、一瞬光って男に刺さる。
「ウッ……ア……ヴァァァァァ――ッ!!」
甲高い断末魔の後、耳をつんざくような鋭い破裂音。男の身体は粉塵となって消し飛んだ。ひながまとっていたオーラも綺麗に消え、いつも通りに戻っていた。
静寂。ついさっきまで起こっていたことが嘘に思えるほどの、静寂。
「はぁ、はぁ……っ……」
赤黒い雲が晴れ、霧もすっかり消えていた。しかし、ひなの気持ちは晴れなかった。

これが夢であればいいのに。そう願うように、ひなは自分の手を見つめた。
大丈夫だった。いつもどおりの手だった。軽く身体を動かす。何も問題はなかった、今までと同じ感触だった。
「これは、夢……」
わざとらしくつぶやく。違和感は感じない、自分の声が普通に聞こえる。自分の頬を軽く叩く。何も変わらない、夢から覚められない。
何もかも、現実だった。風の鳥（ウインド・バード）でリオンと共に助けに来たこと。はやてが既に死んでいたこと。紅の霧を吸収し、強烈な魔法を浴びせたこと。全て、現実だった。
――ただ一つを除いて。
「……んぅ……」
後ろの方で物音がするのを聞いて、ひなはその方向に振り返った。
「はやて……ちゃん……？」
ひなは何度も瞬きした。血まみれの服を来ている彼女の名前を、おそるおそる呼ぶ。
「……ん……ひなちゃん……？」
「はやてちゃん……！」
溢れる思いのまま、ひなははやてに向かって駆け出した。

学園閉鎖編
第６話１　―確実なる侵食―

廃倉庫での戦いの翌日。はやての傷は完治し、いつもどおりの様子で登校していた。
そして、やはりいつもどおり。
「ふにゃ……リオさま……ん……」
一体どんな夢を見ているのだろうか。はやてはくすっと笑った。
昼休み、場所は風紀委員室。ふかふかの高級ソファで気持ちよさそうに昼寝をするひなを横目に、はやては外をぼーっと眺めていた。
渡り廊下を行き交う生徒たち、校庭から聞こえる賑やかな声。風に吹かれ揺れる木々、青空の中、ゆっくりと動く白い雲。ひなの寝息をかすかに耳に入れつつ、ただ一人で眺め続ける。何もない平和な時間を感じつつ、昨日のひなの話を思い出していた。
昨日の戦いの後、ひなから話を詳しく聞いた。ひなの魔法によって男は塵一つ残さず消えてしまったため、男の正体についての手がかりは何にも残らなかったという。
また、話を聞く限りひなにはあの紅い霧を吸収し、魔力として放出できる力があるらしい。ひな本体の魔力はリオンのそれと比べて少ないのだが、外のリソースを使うとな

ると話は別になる。ただ、その影響でやや性格が過激になるとのことだ。
その時のひなもちょっと見てみたかった、とはやては思った。
「リオさま……だ、だめだよ……」
昨日、はやての命を救ったヒロインは夢の中。頬が緩みっぱなしですごく幸せそう。一体どんな夢を見ているのだろうか。意味深な寝言にも惹かれ、はやてはどこか集中出来なかった。
しかし、平和な時間はすぐに崩れ去った。
にわかに騒がしくなる学校の外、慌てて駆け出す生徒たち。異常事態であることが伝わるには充分だ。はやては目つきを一瞬にして変え、窓を開けて身を乗り出す。間もなく、不気味な唸り声が遠くから聞こえてきた。
魔物だ。高校の敷地内に、魔物が現れたのだ。はやては状況を理解するや否や、窓を乗り越え飛び降りた。
3階から飛び降り、当然のように無傷。驚く周りの生徒達には気にかけず、はやては耳を頼りに魔物を探した。場所はおそらく、校庭から。はやては駆け出した。
校庭に向かうと決めた瞬間、脳裏に映像が来る。魔物から逃げようとした特進クラスの男子生徒が転倒し、そこに斧を持った人型の魔物の一撃が振りかざされる――。
――僕が来て正解だった。はやては更に気を引き締めた。

校庭には廃倉庫の時と同じように紅い霧が蔓延し、斧を持ったゴブリンのような魔物が２０体くらい大量発生していた。そこから逃げていく校庭で遊んでいた生徒たち。その中には、脳裏に来た映像と同じ姿の男子生徒もいた。

そして、映像の通りに転ぶ。迫りくるゴブリンたち、手に持つ斧が獲物を見つけてギラリと輝く。

もはや躊躇などない。転倒した男子生徒目掛け薪割りよろしく真っ二つにしようと振りかざされる斧を、はやてはナイフを交差させすんでのところで弾き返す。体勢を崩し後ろにのけぞったところを、喉元目掛けて的確に一突き。

血も、魔力の飛沫も流れない。しかし、ゴブリンは後ろに倒れて動かなくなる。はやてのナイフは、小型の魔物であれば確実に弱点を突き刺して一撃で仕留める。

そのままはやては、周囲にいるゴブリン達を一体ずつ倒していく。姿が霞むほどの速さで近づき、一撃。瞬く間もなく別のゴブリンも、もれなく一撃で葬る。まるでそれが、彼女にとっていとも簡単な仕事であるかのように見えた。

最後の一体に、はやてのナイフが突き刺さる。ゴブリンが力なく倒れるのを見届けると、はやては動けないでいた男子生徒に手を差し伸べた。

「ありがと……あっははは、俺情けねえ……」

男子生徒は自嘲気味に笑い、手を引かれ立ち上がる。事の顛末を見ていた生徒たちか

ら、自然発生的に拍手が起こった。

はやては少し照れくさそうに苦笑いした。

第６話２　―風紀委員室での一幕―

帝華高校、中庭。

「光線、貫け！」

リオンは簡単に詠唱し、スライム型の魔物に短杖を向ける。そこから白銀の光線が発射され、スライムは紅のもやを伴って蒸発する。

「……大丈夫？　怪我はないかしら？」

リオンは、後ろに隠れていた女子生徒の方を振り向き声を掛ける。恐怖に怯えていた女子生徒は、リオンの優しい声で幾分か冷静さを取り戻した。

「リオ様……あ、ありがとうございました！　リオ様！」

助けられた女子生徒は少し頬を朱に染めながら、深々とお礼をした。それを見ていた周りの女子生徒たちも『リオ様素敵！』『リオ様かっこいい！』などと興奮気味に黄色い歓声を上げた。

―――

「……ということがあったのよ。おかげさまで今日の仕事はやたら声を掛けられたからいつもよりだいぶ疲れたわ……」

風紀委員室、放課後。風紀委員の仕事を終えたリオンは、ひなしかいないことをいいことにせんべいをボリボリ食べながら愚痴をこぼした。その姿は普段見せているカリスマ性のかけらすら感じない。もっとも、ひなはそういう所も含めてリオンに好いているが。

「そっかぁ、それでリオ様いつもより人気だったんだねー」

ひなは、近所のコンビニで普通に売られているようなグミであるひもQをかじっている。もちろん高価そうなお菓子を食べることもあるが、大体は庶民的なお菓子を食べているのがこの二人である。カレルチャペックの紅茶を添えて。

「あ、そうそうリオ様。今日、はやてちゃんも人気集めてたよね」

「そうね、校庭に出た魔物を一瞬で片付けたのよね。さすがはやてって言った所かしら。正直羨ましいわ、魔力なしであんな力出せるなんて」

「だねー……どうなってるんだろう？　不思議ー、ちょっと解剖したい」

「たまに怖いこと言うわよねアンタ……」

「病院の娘だし、こういうのは気になるところなんだー」

「ひもQ食べながらそんなこと言うかしら普通」

「えー？」

そんな自然体な会話が落ち着いたところで、二人は誰もいない窓際のソファに目を向

けた。そこは、普段はやてがいる場所。
「今日もまた、『用事がある』って言ってたね。はやてちゃん」
「正直……心配は心配よね。もう甲冑の魔物使いはいないから大丈夫、って言っていたから信じるけれど」
　リオンはどこか落ち着かない様子でつぶやく。あの時はやてを救えたのは、はやて自身の異常とも言える自然治癒力のおかげでもあるが、ひなの魔力吸収からの解放によって魔物使いを魔物共々全滅させたからこそである。一応屋根をぶち破り甲冑の魔物軍団を相手に多少削った功績はあれど、はやての救出自体にリオンはあまり直接関わってなかった。そのためリオンには、その時の心残りが少なからずあった。
「んー……ひなは何も感じないかな、今の所。大丈夫だと思うよ？」
　不安げなリオンに、ひなはふわりとした微笑を向けた。昨日風の鳥（ウインド・バード）ではやてを救出に向かえたのは、実はひなが冷や汗をかくほどの嫌な予感を感じ取ったからである。あまりにもしつこくひなが不安アピールをしてくるので、リオンはひなを心配してどうせそのうち落ち着くだろうと考え同行した。結果、場所も含めドンピシャで的中してしまったのであるが。
「ひながそう言うなら、私はひなを信じるわ」
「信じるのはひなじゃなくてはやてちゃんだよ、リオ様」

ひなはリオンに向かってウインクした。
「ふふ、それもそう、ねっ！」
リオンもお返しでウインクしようとしたが、両目をつぶってしまいうまく出来なかった。えい、えい、と言いながら何度もチャレンジするリオンだったが、戦果は芳しくなかった。
「……出来たかしら？」
「出来てないよ？」
「なんでひなは出来るの、教えて」
「片目をつぶるというよりも、片目を思い切り開くって考えるとやりやすいんだよ？」
「それが出来ないのよー！」
「リオ様可愛い」
「うるさいわねもう！」

第６話３　―『普段の』任務―

「目的地に着きました」
　はやては帝華高校から少し離れた小さな公園に来ていた。Ｍ―ｐｈｏｎｅで通話しながら、物陰から公園内の状況を見る。電話の相手は、宮咲校長だった。
『分かったわ、ありがとう。状況は？』
「帝華の生徒１人が少なくとも３０体以上の魔物と相対しています」
『了解。援護に行ってあげて』
「了解です。では」
　はやてはＭ―ｐｈｏｎｅをしまい、二丁のナイフを持つ。
「いつも同じなんだけどな、その生徒」
　そう独り言を漏らすと、はやては公園内にいる帝華高校の生徒を遠目から見つめる。見覚えのある、深い青い色のポニーテール。大勢のゴブリンの魔物たちに囲まれている彼女――七星海は、すぐにはやての気配を察知して振り向き、待ってましたと言わんばかりに微笑んだ。
　昨日あんな目にあったばかりなのに、危機意識をもっと持ってよ。はやてはむすっと

した顔でそう思いつつも、魔物たちに気づかれないように木の上に飛び移る。
両手首に巻かれている海のリストバンドが、じわりと水色の光を帯びる。
「――我より生まれ、広がれ波紋」
戦闘態勢に入った海は、小さく呪文を呟くと両腕を広げくるりと一回転する。そこから無色透明の透き通った水の刃が水紋のように広がって弾け飛び、海を囲んでいるゴブリンたちに次々と襲いかかる。ゴブリンたちの身体が水の刃に切られ、紅の魔力の飛沫が上がる。しかし、倒し切るまでには至らずに四方八方から海に向かって突進してくる。
しかし海は、全くうろたえなかった。当然、はやてを信じ切っていたからに他ならない。
「危ない真似するね、全く！」
頭上からふわりとした声色が降りかかる。瞬間、ナイフが2本上から飛んできて、海から近い2体のゴブリンの脳天に飛沫も上げずに一本ずつ突き刺さる。すぐさま一人の影が海の目の前に着地し、倒れて動かないゴブリンからナイフを素早く抜き取る。
ナイフを携えた少女は、少し呆れたような表情で海の方を向いた。海はにこりと笑う。
「……うん。今日も、ナナの予想通り」

「まったく……海、昨日危ない目にあったばかりでしょ？」
「それを言うなら、はやてだって」
　はやては少し伏し目がちになる。実際、死にかけた。死にかけたが――。
「僕は……別に、怖くないかな」
　自分が変だと言いたげに、はやての表情が曇る。そう、怖くないのだ。自分が死ぬのが、怖くない。銃弾の音も、巨大な剣も、魔力に満ちた閉鎖空間も――全部、怖くない。それがおかしいことは気づいている、でも、怖くないのだ。
　はやてはそんな自分が、好きではなかった。
「……じゃあ、ナナも。はやてが隣なら、何も怖くない」
　対照的に、海ははやてに向かってにこりと笑ってみせた。
　今、目の前にいる彼女もおかしい。はやてとは違って『任務』でもないのに、自ら進んで危険へと飛び込む。しかも、はやてが来ることを踏んで今みたいな無謀なことをする。迷惑極まりない存在なはずだったが、はやては不思議とそう思わなかった。
　結局、はやてもつられて表情が柔らかくなってしまう。何だかんだ、人に頼られたり甘えられたりするのは嫌いではない。
「そっか。じゃあ……一緒に行くよ！」
「うん。ナナ、信じてる――！」

すると海ははやてを巻き込むかのように、ついさっき放った波紋の魔法を詠唱する。水の刃ははやてだけを綺麗に避け、こちらに向かってくるゴブリンたちを襲い足止めさせる。

そこに生まれたスキをはやては見逃さない。海に近い個体から確実に、1体ずつ的確に急所を付いて一撃で倒していく。魔法を無効化するというはやての特異性を活かした戦法だ。

仮にも斧を持ち地面をえぐるほどの怪力を持つゴブリン。そんなゴブリンの群れの討伐は言うまでもなく危険なのだが、2人にかかればもはや流れ作業と化していた。

「これで、最後――！」

はやてのナイフが最後の1体の喉元を突き刺し、引き抜く。相変わらず魔力の飛沫は一滴たりとも飛び散らず、ゴブリンは斧を落とし後ろにどさりと倒れた。

「ふぅ……ナナ、疲れちゃった」

海の付けているリストバンドが光を失うと、海はへたりとその場で座り込んだ。はやてはナイフをしまい、海と目線を合わせるように隣でかがんだ。

「ありがと、海。やりやすかったよ」

「はやての役に、立てた？」

「当たり前だよ。その証拠に、いつもより疲れてない」

海ははやての様子を見る。普段と何も変わらず、疲れてないと言われてもあんまり分からなかった。
「……そっか？」
「うん。……立てる？」
「もうちょっと、休みたいな」
疲労感とは、人を甘えたい気持ちにさせるものなのだろうか。
本当はもう、歩こうと思えば歩けるし帰れる。しかし、海はもうちょっとだけはやてとの空間を大事にしたかった。

第６話４　―開戦の予兆―

しばらく、公園ではやてと海は時間を共有していた。はやてたちは、一人の魔法使いに対しては異常な量が発生したゴブリンの群れを一掃したものの、その後異常な点は特別見受けられなかった。

はやては一言、海に断りを入れるとＭ―Ｐｈｏｎｅを取り出して通話を掛ける。

「もしもし、中島です。――はい、無事終わりました。大量発生ではあったのですが、特にこれといった異変は見受けられなかったです――」

海は電話をしているはやての横顔をじっと見つめていた。新雪のように真っ白で、柔らかそうな頬。直接触れることが叶えば、たちまちとろけてしまいそうだった。

確かにはやての端正な顔を眺めるのは海にとって至福だった。しかし、電話の時間が経つにつれて、はやての表情が硬くなっていく。海の見たい表情からどんどん遠ざかっていった。海は、嫌な意味で胸が締め付けられるのを覚えた。

既に太陽は地平線に姿を消そうとしていた。

「――はい。では、失礼しますね」

電話を切り、Ｍ―Ｐｈｏｎｅをしまう。はやては宮咲校長への報告を終えると、海に

深刻そうな顔を向けた。海が見たくない表情だ。
「どうしたの……？」
　はやてに、めったに見せない表情を向けられた海は、不安を隠せない様子ではやてに聞き返す。はやては声を潜めて言った。
「あのね……学校に巨大な魔物の反応が生まれ始めたんだって」
「巨大な……？」
　いまいちピンと来ない海。
「それって、あの時の魔物より大きい？」
「多分。予兆があるってことは、そういうことだと思う」
「予兆……」
「僕には分からないんだけど、リオン様なら違和感を覚えるんじゃないのかな……」
　海は複雑そうな表情で、小さくうなずいた。はやては続ける。
「とにかく、もうすぐ大規模な作戦が実行されるみたい。基本は全国から集めたＯＢ・ＯＧを主戦力にして退治するらしいんだけど……特進クラスの生徒も、周囲の雑魚散らしで募集がかかるかもしれない、とは言ってた」
　海はその作戦を聞いて、事の重大さを初めて理解した。帝華学園グループの卒業生達を集め、一丸となって退治する。それだけのことが必要な、あまりにも強大な魔物が出

現するというのだ。

「……まるで、戦争」

海の唇から、ぽつりと言葉がこぼれ落ちた。

「校長先生も言ってた。『これは、現代の魔法戦争にもなりうる』って」

はやては海の手を握った。自分自身を落ち着けるかのように、しっかりと。海は心臓が高鳴る感覚を感じたが、それは決して心地よいものではなかった。